

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次）看護学研究科 看護学専攻 （M）

【設置の趣旨・目的等】

1. ディプロマ・ポリシーに掲げる看護学の研究者・教育者・実践者として修得する能力に関する記述が一般的な記述にとどまっており、明確ではないことや、カリキュラムが養成を目指す高度な看護専門職の養成に対応するものにはなっていないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーとの関係が不明確であるため、それらの妥当性や整合性を判断することができない。このため、ディプロマポリシーにおいて修得する能力を明確にした上で、養成する人材と3つのポリシーの整合性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像と3つのポリシーの整合性について、図や表を用いて明確に説明すること。【研究科共通】（是正事項）・・・5
2. 博士前期課程と博士後期課程を同時に設置する理由として、両課程の相互交流による双方の学修内容を深めることや、学部生の TA として授業を補佐する役割等が挙げられているが、本来それぞれの課程において学ぶべき学修内容や教育効果の観点からの説明がなされていないため、各課程のカリキュラムの連動性や連続性を含めて、明確に説明すること。【研究科共通】（是正事項）・・・10

【教育課程等】

3. 審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、審査意見1への対応を踏まえて、本研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的に担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明すること。また、必要に応じて適切に改めること。【研究科共通】（是正事項）・・・13
4. シラバスの記載について、複数名の教員で実施する科目における各教員の授業回数が見られていない科目がある、「到達目標」の書き方が統一されていないなど、不備が見られるため、網羅的に確認を行い、適切に改めること。【研究科共通】（改善事項）・・・18

【入学者選抜】

5. 入学者選抜について、各試験・審査の評価基準や配分点が記載されていないため、アドミッション・ポリシーとの関連を踏まえ、明確に説明すること。【研究科共通】(是正事項)・・・33
6. アドミッション・ポリシーについて、「看護学の研究者・教育者・実践者として高度な専門性をもって社会貢献できる人」を掲げ、入学時に高度な専門性を求めている一方で、ディプロマ・ポリシーでは「看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・共同する基礎的能力を修得している」として、基礎的能力の修得が学位授与の条件となっており、ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーの整合性に疑義があるため、その妥当性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。(是正事項)・・・37

【教員組織】

7. 専任教員の年齢構成が著しく高齢に偏っていることから、教育研究の継続性を踏まえ、若手教員の採用計画など教員組織の将来構想を明確にするとともに、教員配置の適正化を図ること。(是正事項)・・・39

【その他】

8. 管理運営体制について、教学運営全般に係る事項を審議するため看護学研究科委員会を設置するとの記載があるが、教学運営事項についての決定プロセスが不明確であるため、改めて明確に説明するとともに、併せて学内規定を提出すること。【研究科共通】(改善事項)・・・41

【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】

9. 採用意向アンケート調査について、審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるものの、本研究科は、教育課程を見る限り、看護系大学・大学院の教員不足を背景に、看護系教育者及び研究者を養成するものと見受けられるが、調査対象に、病院や介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所・保健福祉事務所等の教育機関・研究機関以外の施設等が含まれており、調査結果の妥当性を判断することができない。養成する人材像を踏まえ、適切な調査対象を設定した上で、本研究科修了生のニーズがあることを改めて明確に説明すること。【研究科共通】(是正事項)・・・42

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次）看護学研究科 看護学専攻 （D）

【設置の趣旨・目的等】

1. ディプロマ・ポリシーに掲げる看護学の研究者・教育者・実践者として修得する能力に関する記述が一般的な記述にとどまっており、明確ではないことや、カリキュラムが養成を目指す高度な看護専門職の養成に対応するものにはなっていないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーとの関係が不明確であるため、それらの妥当性や整合性を判断することができない。このため、ディプロマポリシーにおいて修得する能力を明確にした上で、養成する人材と3つのポリシーの整合性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像と3つのポリシーの整合性について、図や表を用いて明確に説明すること。【研究科共通】（是正事項）・・・45
2. 博士前期課程と博士後期課程を同時に設置する理由として、両課程の相互交流による双方の学修内容を深めることや、学部生の TA として授業を補佐する役割等が挙げられているが、本来それぞれの課程において学ぶべき学修内容や教育効果の観点からの説明がなされていないため、各課程のカリキュラムの連動性や連続性を含めて、明確に説明すること。【研究科共通】（是正事項）・・・49

【教育課程等】

3. 審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、審査意見1への対応を踏まえて、本研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的に担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明すること。また、必要に応じて適切に改めること。【研究科共通】（是正事項）・・・51
4. シラバスの記載について、複数名の教員で実施する科目における各教員の授業回数が見られていない科目がある、「到達目標」の書き方が統一されていないなど、不備が見られるため、網羅的に確認を行い、適切に改めること。【研究科共通】（改善事項）・・・56

【入学者選抜】

5. 入学者選抜について、各試験・審査の評価基準や配分点が記載されていないため、アドミッション・ポリシーとの関連を踏まえ、明確に説明すること。【研究科共通】(是正事項)・・・63

【教員組織】

6. 研究指導補助教員数について、大学院設置基準の規定を満たしていないため、適切に改めること。(是正事項)・・・67
7. 専任教員の年齢構成が著しく高齢に偏っていることから、教育研究の継続性を踏まえ、若手教員の採用計画など教員組織の将来構想を明確にするとともに、教員配置の適正化を図ること。(是正事項)・・・68

【その他】

8. 管理運営体制について、教学運営全般に係る事項を審議するため看護学研究科委員会を設置するとの記載があるが、教学運営事項についての決定プロセスが不明確であるため、改めて明確に説明するとともに、併せて学内規定を提出すること。【研究科共通】(改善事項)・・・70

【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】

9. 博士後期課程の学生確保の見通しについて、近隣の私立看護系大学院のうち博士後期課程の入学定員が未充足状況の大学がある中において、同時設置する博士前期課程との関係についての説明がなされていないなど、長期的かつ安定的に学生確保の見通しがあることについての根拠が不十分であり判断できない。客観的な根拠を明らかにした上で、改めて明確に説明すること。(是正事項)・・・71

【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】

10. 採用意向アンケート調査について、審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるものの、本研究科は、教育課程を見る限り、看護系大学・大学院の教員不足を背景に、看護系教育者及び研究者を養成するものと見受けられるが、調査対象に、病院や介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所・保健福祉事務所等の教育機関・研究機関以外の施設等が含まれており、調査結果の妥当性を判断することができない。養成する人材像を踏まえ、適切な調査対象を設定した上で、本研究科修了生のニーズがあることを改めて明確に説明すること。【研究科共通】(是正事項)・・・74

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（是正事項）看護学研究科 看護学専攻（M）

【設置の趣旨・目的等】

1. ディプロマ・ポリシーに掲げる看護学の研究者・教育者・実践者として修得する能力に関する記述が一般的な記述にとどまっており、明確ではないことや、カリキュラムが養成を目指す高度な看護専門職の養成に対応するものにはなっていないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーとの関係が不明確であるため、それらの妥当性や整合性を判断することができない。このため、ディプロマポリシーにおいて修得する能力を明確にした上で、養成する人材と3つのポリシーの整合性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像と3つのポリシーの整合性について、図や表を用いて明確に説明すること。

（対応）

本研究科博士前期課程について、当初は、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーの表現が的確ではなかったため、3ポリシーの関係が不明確であった。審査意見1.を踏まえ、養成する人材像、3ポリシーの表現・内容を見直し、養成する人材像と3つのポリシーの妥当性や整合性がとれるように修正した。

【別紙1「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科の養成する人材像と3つのポリシー」参照】

養成する人材像について、当初は「研究的視点を持った実践者」と記し「様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を有する人材」としていた。しかし、本課程は実践者の養成に重きを置いているのではなく、看護学の研究を行う能力を身につけ、研究成果を実践や教育に生かすことができる人材を養成したいという観点から、養成する人材像を「看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人」に改めた。

ディプロマ・ポリシーについて、当初は、Ⅰで研究継続能力、Ⅱで看護教育力、Ⅲで実践・教育・研究における倫理的課題への対応能力、Ⅳで地域や多職種チームでの保健医療貢献能力、Ⅴでコミュニティ連携・協働能力を挙げていた。しかし、養成する人材像の「看護学における研究過程の遂行」に対応したディプロマ・ポリシーとして「Ⅰ. 看護学の研究を遂行する基本的能力を有している」とした。「リサーチエビデンスの教育・実践への活用」に対応したディプロマ・ポリシーとして「Ⅱ. 研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力を修得している」及び「Ⅲ. 看護教育の役割・機能に関する理論的基盤を修得している」とした。「人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決の

ための多職種・地域との連携」に対応したディプロマ・ポリシーとして、当初のポリシーⅢ、Ⅳ、Ⅴを統合し「Ⅳ. 看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有している」とした。以上のように養成する人材像とディプロマ・ポリシーの関係及びディプロマ・ポリシーにおいて修得する能力を明確化した。

次に、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーとの整合性を見直した。カリキュラム・ポリシーは、当初、Ⅰで「共通科目」を看護学の教育・研究・実践における指導的役割を担えるようになるための基盤となる科目としていたが、「指導的役割を担えるようになるため」を削除し、「看護学の教育・研究・実践の基盤となる関連諸科学及び多職種・地域との連携について学修するための科目を配置する」とし、養成する人材像、ディプロマ・ポリシーとの整合性をとった。また、当初のⅡを分割し、Ⅱで専門科目の方針、Ⅲで研究指導の方針を示すよう整理し、改めた。

アドミッション・ポリシーは、当初、Ⅰで看護実践の事象や課題に対する解明意欲、Ⅱで研究や看護専門領域の基礎的知識・技術、Ⅲで地域や多職種との連携や意見表明、Ⅳで看護学の研究者・教育者・実践者としての社会貢献を求めている。「Ⅰ.看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人」は、養成する人材像及び他のポリシーと整合するため変更しなかった。Ⅱはより具体的な表現に改め、「Ⅱ.各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人」とした。養成する人材像と整合しない当初のⅢは削除した。当初のⅣは、審査意見 6.を踏まえ、「Ⅲ.看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人」と適切に改めた。アドミッション・ポリシーについても養成する人材像並びに他のポリシーとの整合性がとれるようにした。

以上より、本課程の養成する人材像と3つのポリシーは整合性がとれている。

(新旧対照表) 養成する人材像 (設置の趣旨等を記載した書類5ページ)

新	旧
看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人の養成を目指す。	研究的視点を持った実践者としての能力をさらに進化させ、看護専門職者として地域において保健医療の発展に貢献できる能力を培うとともに看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を有する人材の育成を目指す。

(新旧対照表) ディプロマ・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 5~6 ページ)

新	旧
<p>以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士(看護学)」の学位を授与する。</p> <p>I. <u>看護学の研究を遂行する基本的能力を有している</u></p> <p>II. <u>研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力を修得している</u></p> <p>III. <u>看護教育の役割・機能に関する理論的基盤を修得している</u></p> <p>IV. <u>看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有している</u></p>	<p>以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士(看護学)」の学位を授与する。</p> <p>I. <u>修得した研究力をさらに進化させ、より卓越した研究へと継続できる能力を修得している</u></p> <p>II. <u>修得した教育力を深め自身の教育能力の向上に努めるとともに看護教育の開発・向上に取り組む能力を修得している</u></p> <p>III. <u>看護の実践・教育・研究における様々な倫理的課題に対応できる能力を修得している</u></p> <p>IV. <u>専門領域の知識・教養を深めた看護専門職者として地域や多職種チームでの保健医療に貢献し寄与する能力を修得している</u></p> <p>V. <u>看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を修得している</u></p>

(新旧対象表) カリキュラム・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 9～10 ページ)

新	旧
<p>教育課程は「<u>共通科目</u>」と「<u>専門科目</u>」で編成し、<u>専門科目</u>に「<u>生涯発達看護学分野</u>」と「<u>広域看護学分野</u>」の2つを置く。教育・学習方法は、講義及び演習を中心とする。学修成果は、授業科目では到達目標と評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による修士学位論文審査・最終試験により評価する。</p> <p>I. 「<u>共通科目</u>」は看護学の教育・研究・実践の基盤となる関連諸科学及び多職種・地域との連携について学修するための科目を配置する</p> <p>II. 「<u>専門科目</u>」は各看護学領域の特性を踏まえた最新の知見や知識を統合し看護実践への洞察を深め、<u>研究・教育能力</u>を修得するための科目を配置する</p> <p>III. <u>研究指導を受け修士論文を作成するとともに継続的に取り組むことができる研究課題を見出すための科目を配置する</u></p>	<p><u>看護学の教育・研究・実践における指導的役割を担う人材を育成するための科目を配置する。</u> <u>専門分野は「生涯発達看護学分野」「広域看護学分野」からなる2分野とし、教育課程は「共通科目」と2分野の「専門科目」により編成する。</u></p> <p>I. <u>共通科目</u>には看護学の教育・研究・実践における指導的役割を担えるようになるための基盤となる<u>看護学及び関連諸科学の理論や技法を修得する科目</u>を配置する。</p> <p>II. <u>専門分野の各看護学領域の専門科目</u>には各看護学領域の特性を踏まえた最新の知見や知識を統合し看護実践への洞察を深め教育能力を修得するための科目を配置する。<u>研究指導を受け修士論文を作成するとともに継続的に取り組むことができる研究課題を見出すための科目を配置する。</u></p> <p><u>学修成果の評価については、授業科目では到達目標と成績評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による修士学位論文審査・最終試験により評価する。</u></p>

(新旧対照表) アドミッション・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 21 ページ)

新	旧
<p>I. 看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</p> <p>II. 各看護専門領域の知識、<u>論理的思考力、英語論文の読解力を有する</u>人</p> <p>III. <u>看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す</u>人</p>	<p>I. 看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</p> <p>II. <u>研究や各看護専門領域の基礎的知識・技術を有している</u>人</p> <p>III. <u>地域や多職種との連携に関わり、チームの中で自ら意見を表明し行動できる</u>人</p> <p>IV. 看護学の<u>研究者・教育者・実践者として高度な専門性をもって社会貢献できる</u>人</p>

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【設置の趣旨・目的等】

2. 博士前期課程と博士後期課程を同時に設置する理由として、両課程の相互交流による双方の学修内容を深めることや、学部生のTAとして授業を補佐する役割等が挙げられているが、本来それぞれの課程において学ぶべき学修内容や教育効果の観点からの説明がなされていないため、各課程のカリキュラムの連動性や連続性を含めて、明確に説明すること。【研究科共通】

(対応)

連続性を含め、両課程が同時に設置されていることによる学修内容や教育効果の観点から、下記の説明を加えることとする。

一点目は、研究の継続性が得られることである。将来、教育者や研究者になることを目指して前期課程を受験し学修しようとする者にとって、後期課程を備えた研究科であることは研究課題の選択と継続的な研究活動にかかわる重要事項である。前期課程で研究の基礎を学び、後期課程への進学後は、連続して一貫した研究指導を受けながら、自立して研究する能力を育むことができる。本学の研究科では、人間の生涯と地域での生活と深くかかわる健康に関し、看護実践の場をよく理解し、教育・研究できる人材養成を目指しており、両課程を通じた学修は連動し増幅する教育効果が期待できる。

二点目は、本学の博士の学位を持たない教員の博士後期課程進学へのニーズがあり、これに応えることが大学としての喫緊の課題となっていることである。前期課程だけでなく後期課程の設置をすることで中堅、若手教員の学位取得を促し、学部学生の教育の質の向上につながり、教員は研究成果の発信力、研究指導力を身につけられると考える。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (6~7 ページ)

新	旧
<p>本学においては、学部から博士後期課程に至る一連の教育・研究のプロセスを構築し卓越した看護学教育・研究者を育成し看護学研究の発展と看護学教員・看護学教育の質向上に取り組むことで地域社会に貢献できるものと考え、博士前期課程・博士後期課程を以下の理由により同時に開設することとした。</p> <p><u>1. 研究の継続性が得られることである。</u> <u>将来、教育者や研究者になることを目指して前期課程を受験し学修しようとする</u></p>	<p>本学においては、学部から博士後期課程に至る一連の教育・研究のプロセスを構築し卓越した看護学教育・研究者を育成し看護学研究の発展と看護学教員・看護学教育の質向上に取り組むことで地域社会に貢献できるものと考え、博士前期課程・博士後期課程を以下の理由により同時に開設することとした。</p> <p><u>1. 博士前期課程・博士後期課程の学生には開講期間中にディスカッション、相互交流を図る学修の機会を設定し看護学探</u></p>

<p><u>る者にとって、後期課程を備えた研究科であることは研究課題の選択と継続的な研究活動にかかわる重要事項である。前期課程で研究の基礎を学び、後期課程への進学後は、連続して一貫した研究指導を受けながら、自立して研究する能力を育むことができる。本学の研究科では、人間の生涯と地域での生活と深くかかわる健康に関し、看護実践の場をよく理解し、教育・研究できる人材養成を目指しており、両課程を通した学修は連動し増幅する教育効果が期待できる。</u></p> <p>2. <u>本学の博士の学位を持たない教員の博士後期課程進学へのニーズがあり、これに応えることが大学としての喫緊の課題となっていることである。前期課程だけでなく後期課程の設置をすることで中堅、若手教員の学位取得を促し、学部学生の教育の質の向上につながり、教員は研究成果の発信力、研究指導力を身につけられると考える。</u></p> <p>3. <u>博士前期課程・博士後期課程の学生には開講期間中にディスカッション、相互交流を図る学修の機会を設定し看護学探求の面白さや、看護の奥深さを実感し双方の学修内容を深められることが期待できる。博士後期課程があることは博士前期課程の学生の学修において先の見通しが立ち学修意欲にもつながる。</u></p> <p>4. <u>学部開設3年次に看護学研究科を開設することにより、教育力育成の一環として例えば学部生の「TA」として授業を補助し、看護職を目指す学部生の教育内容とともに現代の若者の気質・特性も理解できる機会となる。学部生にとっては生涯にわたって研鑽し続ける大学院生を目</u></p>	<p>求の面白さや、看護の奥深さを実感し双方の学修内容を深められることが期待できる。博士後期課程があることは博士前期課程の学生の学修において先の見通しが立ち学修意欲にもつながる。</p> <p>2. <u>本研究科で看護の教育、研究において継続的に研鑽し続ける人を育成することは、本学の教育理念や目的を理解し本学に愛着を持って後輩を育成できる教員の確保や教育の質の担保に繋がる。修士号を持つ教員志望者に対して本学で博士号を取得する課程を開設する必要がある</u></p> <p>3. <u>博士後期課程を同時に設置し連関づけられた教育課程が構築されていることにより両課程の学生に、より学びの深い学修・研究環境を提供できる。</u></p> <p>4. <u>学部開設3年次に看護学研究科を開設することにより、教育力育成の一環として例えば学部生の「TA」として授業を補助し、看護職を目指す学部生の教育内容とともに現代の若者の気質・特性も理解できる機会となる。学部生にとっては生涯にわたって研鑽し続ける大学院生を目</u></p>
--	---

<p>のあたりにし自身のキャリア構築のモデルとなり学修の機会となる。院生・学部生双方にとって有益な機会となる効果が期待できる。</p>	<p>のあたりにし自身のキャリア構築のモデルとなり学修の機会となる。院生・学部生双方にとって有益な機会となる効果が期待できる。</p>
---	---

【教育課程等】

3. 審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、審査意見1への対応を踏まえて、本研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的性が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明すること。また、必要に応じて適切に改めること。【研究科共通】

(対応)

審査意見1. への対応として、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係の明確化をはかった。審査意見3. を踏まえ、本学研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的性が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明する。

博士前期課程の養成する人材像に対し、整合性がとれるようディプロマ・ポリシーの内容・表現を修正した。また、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーを達成するために必要な教育課程について、カリキュラム・ポリシーの表記を整え、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関連を明確化した。ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー、科目配置については、【別紙2「教育課程と3ポリシーの関係：博士前期課程」】に表した。

本学研究科の博士前期課程では、看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人を養成する。

そのため、I.看護学の研究を遂行する基本的能力、II.研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力、III.看護教育の役割・機能に関する理論的基盤、IV.看護学の教育・研究・実践における倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有し、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士（看護学）」の学位を授与することを修了認定・学位授与の方針とする。

これらを可能にするため、看護学の教育・研究・実践の基盤となる関連諸科学及び多職種・地域との連携について学修するための「共通科目」と、各看護学領域の特性を踏まえた最新の知見や知識を統合し看護実践への洞察を深め、研究・教育能力を修得するための「専門科目」で編成し、専門科目に「生涯発達看護学分野」と「広域看護学分野」の2つを置く。研究指導を受け修士論文を作成するとともに継続的に取り組むことができる研究課題を見出すための科目を配置する。講義及び演習を中心とした教育・学習方法とし、到達目標と評価基準をシラバスに明記して学修成果を評価する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (5～6 ページ、9～10 ページ)

新	旧
<p>ア 設置の趣旨及び必要性</p> <p>4. 養成する人材の考え方及びディプロマ・ポリシー</p> <p>2) 博士前期課程</p> <p>博士前期課程では<u>看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人の養成を目指す。博士前期課程のディプロマ・ポリシーを以下に示す。</u>学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)は以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士(看護学)」の学位を授与する。</p> <p>I.<u>看護学の研究を遂行する基本的能力を有している</u></p> <p>II.<u>研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力を修得している</u></p> <p>III.<u>看護教育の役割・機能に関する理論的基盤を修得している</u></p> <p>IV.<u>看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有している</u></p>	<p>ア 設置の趣旨及び必要性</p> <p>4. 養成する人材の考え方及びディプロマ・ポリシー</p> <p>2) 博士前期課程</p> <p>博士前期課程では<u>研究的視点を持った実践者としての能力をさらに進化させ、看護専門職者として地域において保健医療の発展に貢献できる能力を培うとともに看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を有する人材の育成を目指す。学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)は教育研究上の目的に基づき以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士(看護学)」の学位を授与する。博士前期課程のディプロマ・ポリシーを以下に示す。</u></p> <p>I <u>修得した研究力をさらに進化させ、より卓越した研究へと継続できる能力を修得している</u></p> <p>II <u>修得した教育力を深め自身の教育能力の向上に努めるとともに看護教育の開発・向上に取り組む能力を修得している</u></p> <p>III <u>看護の実践・教育・研究における様々な倫理的課題に対応できる能力を修得している</u></p> <p>IV <u>専門領域の知識・教養を深めた看護専門職者として地域や多職種チームでの保健医療に貢献し寄与する能力を修得している</u></p> <p>V <u>看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を修得している</u></p>

<p>エ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 博士前期課程</p> <p><u>看護学において研究過程を遂行することができ、リサーチエビデンスを教育や実践に活用することができ、また人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人を養成する教育課程とする。「教育課程と3ポリシーの関係：博士前期課程」【資料6】</u></p> <p>以下に博士前期課程のカリキュラム・ポリシーを示す。</p> <p><u>教育課程は「共通科目」と「専門科目」で編成し、専門科目に「生涯発達看護学分野」と「広域看護学分野」の2つを置く。教育・学習方法は、講義及び演習を中心とする。学修成果は、授業科目では到達目標と評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による修士学位論文審査・最終試験により評価する。</u></p> <p>I. <u>「共通科目」は看護学の教育・研究・実践の基盤となる関連諸科学及び多職種・地域との連携について学修するための科目を配置する</u></p> <p>II. <u>「専門科目」は各看護学領域の特性を踏まえた最新の知見や知識を統合し看護実践への洞察を深め、研究・教育能力を修得するための科目を配置する</u></p> <p>III. <u>研究指導を受け修士論文を作成するとともに継続的に取り組むことができる研究課題を見出すための科目を配置する</u></p>	<p>エ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 博士前期課程</p> <p><u>研究的視点を持った実践者としての能力や看護専門職者として地域や他職種連携において看護職の役割を果たし保健医療の発展に貢献できる能力を修得する。同時にそれぞれの分野における理論の構築や、システム構築、ケア開発等に向けて研究する能力を培うとともに教育・研究・実践における指導的役割を担う基礎的能力を養う人材を育成する教育課程とする。</u></p> <p>以下に博士前期課程のカリキュラム・ポリシーを示す。</p> <p><u>看護学の教育・研究・実践における指導的役割を担う人材を育成するための科目を配置する。専門分野は「生涯発達看護学分野」「広域看護学分野」からなる2分野とし、教育課程は「共通科目」と2分野の「専門科目」により編成する。</u></p> <p>I <u>共通科目には看護学の教育・研究・実践における指導的役割を担えるようになるための基盤となる看護学及び関連諸科学の理論や技法を修得する科目を配置する。</u></p> <p>II <u>専門分野の各看護学領域の専門科目には各看護学領域の特性を踏まえた最新の知見や知識を統合し看護実践への洞察を深め教育能力を修得するための科目を配置する。研究指導を受け修士論文を作成するとともに継続的に取り組むことができる研究課題を見出すための科目を配置する。</u></p> <p><u>学修成果の評価については、授業科目で</u></p>
---	--

<p>学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連から、ディプロマ・ポリシーに関連が強い授業科目は以下のとおりである。</p> <p>1) 博士前期課程 共通科目</p> <p><u>看護学の研究を遂行する基本的能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅠと強く関連する科目として「看護学の実践と研究 特講 1」「看護学研究方法論Ⅰ（総論）」「看護学研究方法論Ⅱ（統計解析）」「臨床疫学」を設定する。看護教育の役割・機能に関する理論的基盤を修得するというディプロマ・ポリシーⅢと強く関連する科目として「看護教育論」「医学教育論」を設定する。看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅣと強く関連する科目として「看護倫理」「臨床哲学」「地域生活看護論Ⅰ」「チーム医療論」「看護管理」を設定する。</u></p> <p><u>看護学の研究を遂行する基本的能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅠと強く関連する科目として「リプロダクティブヘルス看護学特論M」「リプロダクティブヘルス看護学演習Ⅱ」「小児看護学特論M」「成人看護学特論M」「成人看護学演習Ⅱ」「老年看護学特論M」「在宅看護学演習Ⅱ」「公衆衛生看護学特論M」「看護学特別研究 M」を設定する。研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅡと強く関連する科目として「リプロダクティブヘル</u></p>	<p><u>は到達目標と成績評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による修士学位論文審査・最終試験により評価する。</u></p> <p>学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連から、ディプロマ・ポリシーに関連が強い授業科目は以下のとおりである。</p> <p>1) 博士前期課程 共通科目</p> <p><u>共通科目にはそれぞれの専門分野において、研究的視点を持つ実践者・教育者・研究者に必要とされる教育能力、研究の遂行に必要なとされる研究能力、地域においてコミュニティと連携・協働する能力、看護の実践・教育・研究における倫理的課題に対応できる能力を培うために必要な合計 11科目を配置する。</u></p> <p><u>ディプロマ・ポリシーⅠへの対応として研究力をさらに進化させ、より卓越した研究へと継続できる能力を修得するため「看護学の実践と研究 特講 1」「看護学研究方法論Ⅰ（総論）」「看護学研究方法論Ⅱ（統計解析）」「臨床疫学」を設定する。またディプロマ・ポリシーⅡへの対応として自身の教育能力向上、看護教育の開発・向上に取り組む能力を修得するため「看護教育論」「看護管理」「医療教育論」を設定する。ディプロマ・ポリシーⅢへの対応として看護の実践・教育研究における様々な倫理的課題に対応できる能力の育成のために「看護倫理」「臨床哲学」を設定する。ディプロマ・ポリシーⅣへの対応として看護専門職者として地域や多職種チームでの保健医療に貢献する能力育成のため「地域生活看護論Ⅰ」「チーム医療論」「看護管理」を設定する。ディプロマ・ポリシーⅤへの対応として様々な</u></p>
---	--

<p>ス看護学演習Ⅰ」「小児看護学演習Ⅰ」「老年看護学演習Ⅰ」「老年看護学演習Ⅱ」「在宅看護学演習Ⅰ」「公衆衛生看護学演習Ⅱ」を設定する。看護教育の役割・機能に関する理論的基盤を修得するというディプロマ・ポリシーⅢと強く関連する科目として「公衆衛生看護学演習Ⅰ」を設ける。看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅣと強く関連する科目として「小児看護学演習Ⅱ」「成人看護学演習Ⅰ」「在宅看護学特論M」を設定する。</p>	<p>コミュニティーと連携・協働する基礎的能力として「地域生活看護論Ⅰ」「チーム医療論」「看護管理」を設定する。</p>
--	--

(改善事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【教育課程等】

4. シラバスの記載について、複数名の教員で実施する科目における各教員の授業回数が示されていない科目がある、「到達目標」の書き方が統一されていないなど、不備が見られるため、網羅的に確認を行い、適切に改めること。【研究科共通】

(対応)

シラバスについて、複数名の教員で実施する科目において、各回の授業担当者を記載した。加えて、各教員が担当する授業回数を「担当教員」欄の教員名の後ろに () 書きで記載した。また、「授業の到達目標」は番号を付して箇条書きとし、それぞれ「…ができる」という表現に改め、到達目標を明確にした。

(新旧対照表) シラバス (授業計画)

新	旧
<p>2・3 ページ</p> <p>「看護学の実践と研究 特講Ⅰ」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子(6回)、福島道子(1回)、北岡英子(1回)、小山幸代(1回)、竹本三重子(1回)、和田美也子(1回)、西村あをい(1回)、野中淳子(4回)、米山雅子(1回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 看護学の成り立ち、構成要素、概念と理論を学び、実践と研究のモデル例を理解することを通じて、看護学の実践と研究における理論的見識を深めることができる。</p>	<p>2・3 ページ</p> <p>「看護学の実践と研究 特講Ⅰ」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子、福島道子、北岡英子、小山幸代、竹本三重子、和田美也子、西村あをい、野中淳子、米山雅子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>看護学の成り立ち、構成要素、概念と理論を学び、実践と研究のモデル例を理解することを通じて、看護学の実践と研究における理論的見識を深めることができる。</p>
<p>4 ページ</p> <p>「看護学研究方法論Ⅰ (総論)」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子(6回)、野中淳子(2回)、森明子(1回)、眞鍋知子(1回)、北岡英子(1回)、米山雅子(1回)、入江晶子(1回)、小森直美(1回)、和田美也子(1回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>3. 看護研究における代表的な研究法の理論的・哲学的基盤と研究プロセスを理解することができる。</p>	<p>4 ページ</p> <p>「看護学研究方法論Ⅰ (総論)」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子、野中淳子、森明子、眞鍋知子、北岡英子、米山雅子、入江晶子、小森直美、和田美也子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>3. 看護研究における代表的な研究法の理論的・哲学的基盤と研究プロセスを理解する。</p>

<p>5 ページ</p> <p>「看護倫理」</p> <p>担当教員 鶴若麻理(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>看護実践と倫理の関係性について理解することができる。</u></p> <p>2. <u>看護実践における具体的な倫理上の課題を述べることができる。</u></p> <p>3. <u>倫理への接近法を理解することができる。</u></p>	<p>5 ページ</p> <p>「看護倫理」</p> <p>担当教員 鶴若麻理</p> <p>授業の到達目標</p> <p>看護実践と倫理の関係性について理解する</p> <p>看護実践における具体的な倫理上の課題を述べるができる</p> <p>倫理への接近法を<u>学ぶ</u></p>
<p>7 ページ</p> <p>「臨床哲学」</p> <p>担当教員 久富健(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>臨床の現場で、「哲学すること」の重要性に気づき、「他者」への想像力と「自己」への洞察力を培うことができる。</u></p> <p>2. 「臨床哲学」に関する基礎文献をしっかりと読解し、<u>哲学的思考を身につけることを心掛けることができる。</u></p>	<p>7 ページ</p> <p>「臨床哲学」</p> <p>担当教員 久富健</p> <p>授業の到達目標</p> <p>臨床の現場で、「哲学すること」の重要性に気づき、「他者」への想像力と「自己」への洞察力を培うことを<u>目標にする。そのためには、「臨床哲学」に関する基礎文献をしっかりと読解し、哲学的思考を身につけることを心掛ける必要がある。</u></p>
<p>8 ページ</p> <p>「看護教育論」</p> <p>担当教員 小山真理子(8回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 人材育成に関連する政策と教育の関連性について理解し、<u>グローバルな視点から教育の機能と教育者としての役割について考察することができる。</u></p> <p>2. <u>看護学教育カリキュラムに影響を与える要因、および、カリキュラム（プログラム）作成上の留意点について理解することができる。</u></p> <p>3. <u>学習者の能力を育成するための効果的な教授・学習方法について理解することができる。</u></p>	<p>8 ページ</p> <p>「看護教育論」</p> <p>担当教員 小山真理子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 人材育成に関連する政策と教育の関連性について理解し、<u>グローバルな視点から教育の機能と教育者としての役割について考察する。</u></p> <p>2. <u>看護学教育カリキュラムに影響を与える要因、および、カリキュラム（プログラム）作成上の留意点について理解する。</u></p> <p>3. <u>学習者の能力を育成するための効果的な教授・学習方法について理解する。</u></p>

<p>4. 看護学教育における実習の目的について理解し、学習者の学びを育む実習指導のあり方について<u>考察することができる。</u></p> <p>5. 評価の理論について理解し、信頼性、妥当性のある評価を行うための基礎知識を理解する<u>ことができる。</u></p> <p>6. 看護基礎教育及び継続教育における倫理的課題について<u>考察することができる。</u></p>	<p>4. 看護学教育における実習の目的について理解し、学習者の学びを育む実習指導のあり方について考察する。</p> <p>5. 評価の理論について理解し、信頼性、妥当性のある評価を行うための基礎知識を理解する。</p> <p>6. 看護基礎教育及び継続教育における倫理的課題について考察する。</p>
<p>9 ページ</p> <p>「地域生活看護論Ⅰ」</p> <p>担当教員 小山幸代(4回)、福島道子(4回)、北岡英子(7回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 健康レベルが様々な高齢者が、施設や病院・地域・在宅において、それぞれにどのような生活をしているのか、また生活していく中で行政・保健・医療・福祉にどのような支援を受けているのか等を学修し看護ケアを継続的に提供していくための課題について提言できる。</p>	<p>9 ページ</p> <p>「地域生活看護論Ⅰ」</p> <p>担当教員 小山幸代、福島道子、北岡英子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>健康レベルが様々な高齢者が、施設や病院・地域・在宅において、それぞれにどのような生活をしているのか、また生活していく中で行政・保健・医療・福祉にどのような支援を受けているのか等を学修し看護ケアを継続的に提供していくための課題について提言できる。</p>
<p>10 ページ</p> <p>「看護学研究方法論Ⅱ（統計解析）」</p> <p>担当教員 窪田和巳(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 医療・看護分野で必要とされる研究方法の手順を理解するとともに、基本的なデータ解析手法について、統計解析ソフトを使用して実践することができる。</p>	<p>10 ページ</p> <p>「看護学研究方法論Ⅱ（統計解析）」</p> <p>担当教員 窪田和巳</p> <p>授業の到達目標</p> <p>医療・看護分野で必要とされる研究方法の手順を理解するとともに、基本的なデータ解析手法について、統計解析ソフトを使用して実践することができる<u>ことを目標とする。</u></p>
<p>11・12 ページ</p> <p>「チーム医療論」</p> <p>単位 <u>2</u></p> <p>担当教員 宗像博美(15回)</p>	<p>11・12 ページ</p> <p>「チーム医療論」</p> <p>単位 <u>1</u></p> <p>担当教員 宗像博美</p>

<p>授業の到達目標</p> <p>1. 患者満足度の高い医療を提供していくために、複数の医療専門職がチームとして一人一人の患者に関与していく必要性が<u>理解</u>できる。</p> <p>2. 外来患者（受診から帰宅後まで）、および入院患者（受診から退院後の療養まで）の医療の流れを理解し、その過程で医療チームの構成員としてどのように参加していけばよいか、職能・役割、医療倫理等の基本的知識を習得することが<u>できる</u>。</p> <p>教科書参考書</p> <p>教科書 特になし。資料プリントを配布する。</p>	<p>授業の到達目標</p> <p><u>医療は高度化・細分化が進んでおり</u>、患者満足度の高い医療を提供していくためには、複数の医療専門職がチームとして一人一人の患者に関与していく必要性が<u>ある</u>。</p> <p>本講義では、①外来患者（受診から帰宅後まで）、および②入院患者（受診から退院後の療養まで）の医療の流れを理解し、その過程で医療チームの構成員としてどのように参加していけばよいか、職能・役割、医療倫理等の基本的知識を習得することを<u>目的とする</u>。</p> <p>教科書参考書</p> <p>資料プリントを配布する。</p>
<p>13 ページ</p> <p>「医療教育論」</p> <p>担当教員</p> <p>神代龍吉(8回)</p>	<p>13 ページ</p> <p>「医療教育論」</p> <p>担当教員</p> <p>神代龍吉</p>
<p>14・15 ページ</p> <p>「看護管理」</p> <p>担当教員</p> <p>吉田千文(8回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>看護管理に関する以下の項目について関連する概念を理解し、看護実践現場の現象と関連させて説明することができる。</u></p> <p>①看護実践現場で求められるリーダーシップ及びマネジメントと課題</p> <p>②組織論の変遷と看護組織の課題</p> <p>③変革とイノベーションの定義と方法</p> <p>④問題解決・意思決定プロセスと組織的方法</p> <p>⑤看護職のキャリア課題と人材育成の方法</p> <p>⑥看護組織における組織文化の課題</p> <p>⑦診療報酬。介護報酬と病院経営の課題</p> <p>2. <u>最終的に学習を踏まえて看護管理の目的と方法について自身の考えを述べる</u>ことができる。</p>	<p>14・15 ページ</p> <p>「看護管理」</p> <p>担当教員</p> <p>吉田千文</p> <p>授業の到達目標</p> <p>看護管理に関する以下の項目について関連する概念を理解し、看護実践現場の現象と関連させて説明することができる。</p> <p>①看護実践現場で求められるリーダーシップ及びマネジメントと課題</p> <p>②組織論の変遷と看護組織の課題</p> <p>③変革とイノベーションの定義と方法</p> <p>④問題解決・意思決定プロセスと組織的方法</p> <p>⑤看護職のキャリア課題と人材育成の方法</p> <p>⑥看護組織における組織文化の課題</p> <p>⑦診療報酬。介護報酬と病院経営の課題</p> <p><u>そして、最終的に学習を踏まえて看護管理の目的と方法について自身の考えを述べる</u>ことができる。</p>

<p>16・17 ページ</p> <p>「臨床疫学」</p> <p>担当教員 森田光治良(8回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>臨床の疑問 (clinical question) を研究仮説(research question)に構造化する PICO の利用ができる。</u></p> <p>2. <u>研究の実行可能性や研究の新規性について FINER を用いて評価できる。</u></p> <p>3. <u>様々な疫学研究手法の利点と欠点を説明できる。</u></p> <p>4. <u>臨床の疑問に適した研究手法の選択ができる。</u></p> <p>5. <u>臨床の疑問にあった先行研究の検索ができる。</u></p> <p>6. <u>先行研究の批判的吟味ができる。</u></p> <p>7. <u>先行研究結果の臨床適応可能性について評価ができる。</u></p>	<p>16・17 ページ</p> <p>「臨床疫学」</p> <p>担当教員 森田光治良</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>臨床の疑問 (clinical question) を研究仮説(research question)に構造化する PICO の利用が出来る。</u></p> <p><u>研究の実行可能性や研究の新規性について FINER を用いて評価できる。</u></p> <p><u>様々な疫学研究手法の利点と欠点を説明できる。</u></p> <p><u>臨床の疑問に適した研究手法の選択ができる。</u></p> <p><u>臨床の疑問にあった先行研究の検索ができる。</u></p> <p><u>先行研究の批判的吟味ができる。</u></p> <p><u>先行研究結果の臨床適応可能性について評価ができる。</u></p>
<p>18 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学特論M」</p> <p>担当教員 森明子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>人間の性と生殖の仕組みと生涯にわたる健康との関連、リプロダクティブヘルスの課題や問題を理解することができる。</u></p> <p>2. <u>リプロダクティブヘルスを支援するために必要な概念、理論について調べ、考察することができる。</u></p>	<p>18 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学特論M」</p> <p>担当教員 森明子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 人間の性と生殖の仕組みと生涯にわたる健康との関連、リプロダクティブヘルスの課題や問題を理解する。</p> <p>2. リプロダクティブヘルスを支援するために必要な概念、理論について調べ、考察する。</p>
<p>19 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習I」</p> <p>担当教員 森明子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>特定のライフステージやリプロダクティブヘルスの課題・問題に焦点を当て、文献検討を通じて分析することができる。</u></p>	<p>19 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習I」</p> <p>担当教員 森明子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 特定のライフステージやリプロダクティブヘルスの課題・問題に焦点を当て、文献検討を通じて分析する。</p>

<p>2. 特定のライフステージやリプロダクティブヘルスの課題・問題に対するケアモデル、支援システムを<u>考案</u>することができる。</p>	<p>2. 特定のライフステージやリプロダクティブヘルスの課題・問題に対するケアモデル、支援システムを<u>検討</u>する。</p>
<p>20 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 森明子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. リプロダクティブヘルス看護学演習Ⅰで検討したケアモデルの実践可能性や研究課題となりうるトピックスについて<u>分析、考察</u>することができる。</p> <p>2. 1. の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる<u>ことができる</u>。</p>	<p>20 ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 森明子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. リプロダクティブヘルス看護学演習Ⅰで検討したケアモデルの実践可能性や研究課題となりうるトピックスについて<u>検討</u>する。</p> <p>2. 1. の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる。</p>
<p>21・22 ページ</p> <p>「小児看護学特論M」</p> <p>担当教員 野中淳子(11回)、西村あをい(2回)、米山雅子(2回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 小児看護の対象となる子どもと家族を理解するための概念や理論について<u>理解</u>することができる。</p> <p>2. 近年の研究動向から小児看護の対象となる子どもと家族を取り巻く社会および小児医療および小児看護における知見を分析する<u>ことができる</u>。</p> <p>3. 小児看護に関連した必要な概念や理論を実践への適用・活用へ向けて分析・考察する<u>ことができる</u>。</p>	<p>21・22 ページ</p> <p>「小児看護学特論M」</p> <p>担当教員 野中淳子、西村あをい、米山雅子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 小児看護の対象となる子どもと家族を理解するための概念や理論について理解する。</p> <p>2. 近年の研究動向から小児看護の対象となる子どもと家族を取り巻く社会および小児医療および小児看護における知見を分析する。</p> <p>3. 小児看護に関連した必要な概念や理論を実践への適用・活用へ向けて分析・考察する。</p>
<p>23・24 ページ</p> <p>「小児看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 野中淳子(6回)、西村あをい(4回)、米山雅子(5回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 子どもの様々な健康問題や健康課題に焦点をあて、文献検討を通じて分析する<u>ことができる</u>。</p> <p>2. 特定の子どもと家族の健康問題や課題や小児看護の</p>	<p>23・24 ページ</p> <p>「小児看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 野中淳子、西村あをい、米山雅子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 子どもの様々な健康問題や健康課題に焦点をあて、文献検討を通じて分析する。</p> <p>2. 特定の子どもと家族の健康問題や課題や小児看護の</p>

<p>課題・問題に対する支援システム等を<u>考察</u>することができ<u>る</u>。</p>	<p>課題・問題に対する支援システム等を<u>検討</u>する。</p>
<p>25 ページ</p> <p>「小児看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 米山雅子(15回)、野中淳子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 学習者の経験および小児看護学演習Ⅰで検討し学習した内容および実践可能性や研究課題となりうる事例を<u>検討し考察</u>することができる。</p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 科目のガイダンス/小児看護実践ケアモデルの概要 <u>野中/米山</u> 2 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築① <u>野中/米山</u> 3 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク① <u>野中/米山</u> 4 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク② <u>野中/米山</u> 5 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク③ <u>野中/米山</u> 6 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク④ <u>野中/米山</u> 7 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク⑤ <u>野中/米山</u> 8 フィールドワークの報告、討論 <u>野中/米山</u> 9 事例分析・評価 <u>野中/米山</u> 10 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築① <u>野中/米山</u> 11 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築② <u>野中/米山</u> 12 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築③ <u>野中/米山</u> 	<p>25 ページ</p> <p>「小児看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 米山雅子、野中淳子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 学習者の経験および小児看護学演習Ⅰで検討し学習した内容および実践可能性や研究課題となりうる事例について検討する。</p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 科目のガイダンス/小児看護実践ケアモデルの概要 2 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築① 3 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク① 4 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク② 5 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク③ 6 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク④ 7 フィールドワーク：ケアモデルの構築のためのフィールドワーク⑤ 8 フィールドワークの報告、討論 9 事例分析・評価 10 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築① 11 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築② 12 健康課題をもつ子どもと家族のためのケアモデル構築③

<p>13 健康課題をもつ子どもと家族のための ケアモデル構築④ <u>野中／米山</u></p> <p>14 プレゼンテーション <u>野中／米山</u></p> <p>15 まとめ <u>野中／米山</u></p>	<p>13 健康課題をもつ子どもと家族のための ケアモデル構築④</p> <p>14 プレゼンテーション</p> <p>15 まとめ</p>
<p>26・27 ページ</p> <p>「成人看護学特論M」</p> <p>担当教員 黒田裕子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 成人看護学の対象となる患者の体験を理解するために必要な諸概念、理論を理解し、活用できる能力を養うことができる。</p> <p>授業内容</p> <p>第2回 <u>急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学</u>に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p> <p>第3回 <u>急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学</u>に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p> <p>第4回 <u>急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学</u>に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p>	<p>26・27 ページ</p> <p>「成人看護学特論M」</p> <p>担当教員 黒田裕子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 成人看護学の対象となる患者の体験を理解するために必要な諸概念、理論を理解し、活用できる能力を養う。</p> <p>授業内容</p> <p>第2回 性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p> <p>第3回 性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p> <p>第4回 性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における主要な概念・理論と、そのとらえ方について（講義）</p>
<p>28 ページ</p> <p>「成人看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 竹本三重子(9回)、眞鍋知子(8回)</p>	<p>28 ページ</p> <p>「成人看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 竹本三重子、眞鍋知子</p>
<p>29 ページ</p> <p>「成人看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 眞鍋知子(15回)、和田美也子(15回)</p>	<p>29 ページ</p> <p>「成人看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 眞鍋知子、和田美也子</p>

<p>授業の到達目標</p> <p>1. 成人看護学演習Ⅰで検討したケアモデルの実践可能性や研究課題となりうるトピックスについて<u>分析することができる。</u></p> <p>2. 1. の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる<u>ことができる。</u></p>	<p>授業の到達目標</p> <p>1. 成人看護学演習Ⅰで検討したケアモデルの実践可能性や研究課題となりうるトピックスについて<u>検討する。</u></p> <p>2. 1. の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる。</p>
<p>授業計画</p>	<p>授業計画</p>
<p>授業内容</p>	<p>授業内容</p>
<p>1 科目のガイダンス、学習者のレディネスの共有 <u>真鍋／和田</u></p> <p>2 演習計画の立案 <u>真鍋／和田</u></p> <p>3 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る <u>真鍋／和田</u></p> <p>4 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る <u>真鍋／和田</u></p> <p>5 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る <u>真鍋／和田</u></p> <p>6 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る <u>真鍋／和田</u></p> <p>7 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る <u>真鍋／和田</u></p> <p>8 フィールドワークの報告、討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>9 ケアモデルの改善案 <u>真鍋／和田</u></p> <p>10 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>11 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>12 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>13 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>14 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論 <u>真鍋／和田</u></p> <p>15 まとめ <u>真鍋／和田</u></p>	<p>1 科目のガイダンス、学習者のレディネスの共有</p> <p>2 演習計画の立案</p> <p>3 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る</p> <p>4 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る</p> <p>5 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る</p> <p>6 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る</p> <p>7 フィールドワーク：看護の実践可能性、また研究課題としての実現可能性を探る</p> <p>8 フィールドワークの報告、討論</p> <p>9 ケアモデルの改善案</p> <p>10 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論</p> <p>11 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論</p> <p>12 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論</p> <p>13 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論</p> <p>14 研究課題、研究計画の立案に向けた文献検討と討論</p> <p>15 まとめ</p>

<p>30 ページ</p> <p>「老年看護学特論M」</p> <p>担当教員 小山幸代(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 高齢者の特性を理解するための重要概念、その特性を踏まえて看護を実践するために有用な理論・モデルについて説明できる。</p> <p>2. 老年看護実践における課題、老年看護学分野の教育・研究上の課題について検討できる。</p>	<p>30 ページ</p> <p>「老年看護学特論M」</p> <p>担当教員 小山幸代</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・高齢者の特性を理解するための重要概念、その特性を踏まえて看護を実践するために有用な理論・モデルについて説明できる。</p> <p>・老年看護実践における課題、老年看護学分野の教育・研究上の課題について検討できる。</p>
<p>31 ページ</p> <p>「老年看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 小山幸代(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 高齢者と家族を支える国内外の保健医療システムの特徴を説明できる。</p> <p>2. 高齢者と家族のサポートシステムとその利用の実際を取り上げ、高齢者が住み慣れた地域で暮らすことを支える支援のあり方と看護職者の役割について検討できる。</p>	<p>31 ページ</p> <p>「老年看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 小山幸代</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・高齢者と家族を支える国内外の保健医療システムの特徴を説明できる。</p> <p>・高齢者と家族のサポートシステムとその利用の実際を取り上げ、高齢者が住み慣れた地域で暮らすことを支える支援のあり方と看護職者の役割について検討できる。</p>
<p>32 ページ</p> <p>「老年看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 小山幸代(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 特定の健康状態の事例を想定して、最新の知識・技術を活用したベストプラクティスについて探求できる。</p> <p>2. 認知症のある高齢者と家族への看護の現状を知り、課題とその解決方略について検討できる。</p>	<p>32 ページ</p> <p>「老年看護学演習Ⅱ」</p> <p>担当教員 小山幸代</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・特定の健康状態の事例を想定して、最新の知識・技術を活用したベストプラクティスについて探求できる。</p> <p>・認知症のある高齢者と家族への看護の現状を知り、課題とその解決方略について検討できる。</p>

<p>33・34 ページ</p> <p>「在宅看護学特論M」</p> <p>担当教員 福島道子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の目的および基盤となる理念を理解する<u>ことができる。</u></p> <p>2. 在宅看護における対象特性を理解する<u>ことができる。</u></p> <p>3. 在宅療養者を取りまく看護援助および法令・制度の動向を理解する<u>ことができる。</u></p>	<p>33・34 ページ</p> <p>「在宅看護学特論M」</p> <p>担当教員 福島道子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の目的および基盤となる理念を理解する。</p> <p>2. 在宅看護における対象特性を理解する。</p> <p>3. 在宅療養者を取りまく看護援助および法令・制度の動向を理解する。</p>
<p>35 ページ</p> <p>「在宅看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 福島道子(15回)、小森直美(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の諸問題・課題を文献検討を通して考察する<u>ことができる。</u></p> <p>2. 在宅看護に関連する保健・医療・福祉の諸問題・課題を通して考察する<u>ことができる。</u></p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <p>1 科目オリエンテーション、在宅療養者・家族を巡る 文献検討 福島/小森</p> <p>2 在宅療養者・家族に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>3 在宅療養者・家族に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>4 在宅療養者・家族に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>5 在宅看護の支援者に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>6 在宅看護の支援者に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>7 支援技術・方法に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>8 支援技術・方法に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>9 ケアマネジメント /連携に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p> <p>10 ケアマネジメント /連携に関する文献検討 <u>福島/小森</u></p>	<p>35 ページ</p> <p>「在宅看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 福島道子、小森直美</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の諸問題・課題を文献検討を通して考察する。</p> <p>2. 在宅看護に関連する保健・医療・福祉の諸問題・課題を通して考察する。</p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <p>1 科目オリエンテーション、在宅療養者・家族を巡る 文献検討</p> <p>2 在宅療養者・家族に関する文献検討</p> <p>3 在宅療養者・家族に関する文献検討</p> <p>4 在宅療養者・家族に関する文献検討</p> <p>5 在宅看護の支援者に関する文献検討</p> <p>6 在宅看護の支援者に関する文献検討</p> <p>7 支援技術・方法に関する文献検討</p> <p>8 支援技術・方法に関する文献検討</p> <p>9 ケアマネジメント /連携に関する文献検討</p> <p>10 ケアマネジメント/連携に関する文献検討</p>

11 在宅看護の目的・理念に関する文献検討	<u>福島／小森</u>	11 在宅看護の目的・理念に関する文献検討
12 在宅看護の目的・理念に関する文献検討	<u>福島／小森</u>	12 在宅看護の目的・理念に関する文献検討
13 法・制度に関する文献検討	<u>福島／小森</u>	13 法・制度に関する文献検討
14 法・制度に関する文献検討	<u>福島／小森</u>	14 法・制度に関する文献検討
15 総括	<u>福島／小森</u>	15 総括
36・37 ページ		36・37 ページ
「在宅看護学演習Ⅱ」		「在宅看護学演習Ⅱ」
担当教員		担当教員
福島道子(15回)、小森直美(15回)		福島道子、小森直美
授業の到達目標		授業の到達目標
1. 在宅看護学演習Ⅰで行った文献検討に基づき、研究課題となりうるトピックスについて検討する <u>ことができる。</u>		1. 在宅看護学演習Ⅰで行った文献検討に基づき、研究課題となりうるトピックスについて検討する。
2. 上記1の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる <u>ことができる。</u>		2. 上記1の過程を踏まえ、自身の研究課題、研究計画へと発展させる。
授業計画		授業計画
授業内容		授業内容
1 科目オリエンテーション/研究課題の明確化	<u>福島／小森</u>	1 科目オリエンテーション/研究課題の明確化
2 研究課題の明確化	<u>福島／小森</u>	2 研究課題の明確化
3 研究課題の明確化	<u>福島／小森</u>	3 研究課題の明確化
4 研究課題の明確化	<u>福島／小森</u>	4 研究課題の明確化
5 研究課題に関する既存研究の動向	<u>福島／小森</u>	5 研究課題に関する既存研究の動向
6 研究課題に関する既存研究の動向	<u>福島／小森</u>	6 研究課題に関する既存研究の動向
7 研究課題に関する研究方法の検討	<u>福島／小森</u>	7 研究課題に関する研究方法の検討
8 研究課題に関する研究方法の検討	<u>福島／小森</u>	8 研究課題に関する研究方法の検討
9 研究課題に関する研究方法の検討	<u>福島／小森</u>	9 研究課題に関する研究方法の検討
10 研究課題に関する研究方法の検討	<u>福島／小森</u>	10 研究課題に関する研究方法の検討
11 在宅看護研究における研究倫理	<u>福島／小森</u>	11 在宅看護研究における研究倫理
12 在宅看護研究における研究倫理	<u>福島／小森</u>	12 在宅看護研究における研究倫理
13 フィールドワーク(研究の実行可能性の検討)	<u>福島／小森</u>	13 フィールドワーク(研究の実行可能性の検討)
14 フィールドワーク(研究の実行可能性の検討)	<u>福島／小森</u>	14 フィールドワーク(研究の実行可能性の検討)
15 総括	<u>福島／小森</u>	15 総括

<p>38 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学特論M」</p> <p>担当教員 北岡英子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 地域で生活する個人・家族・集団・地域を対象に健康課題や要因について理解できる。</p> <p>2. 地域での課題解決のための方策、他機関・職種との連携のあり方が理解できる。</p> <p>3. 地域ケアシステム構築に必要な理論・モデルについて理解できる。</p>	<p>38 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学特論M」</p> <p>担当教員 北岡英子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・地域で生活する個人・家族・集団・地域を対象に健康課題や要因について理解できる。</p> <p>・地域での課題解決のための方策、他機関・職種との連携のあり方が理解できる。</p> <p>・地域ケアシステム構築に必要な理論・モデルについて理解できる。</p>
<p>39・40 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 北岡英子(15回)、入江晶子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 公衆衛生看護学領域における基本的概念について実例を用いてプレゼンテーションができる。</p> <p>2. 公衆衛生看護学の対象への支援方法について実例を用いてプレゼンテーションができる。</p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <p>1 授業ガイダンス：授業概要、目的、 授業内容についてのガイダンス 北岡／入江</p> <p>2 公衆衛生看護活動の基盤となる理論（健康概念・プライマリヘルスケア・ヘルスプロモーション） 北岡／入江</p> <p>3 公衆衛生看護活動における保健行動にかかわる概念（ライフ・スキル、ヘルスリテラシー等） 北岡／入江</p> <p>4 行動変容にかかわる理論①（学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等） 北岡／入江</p> <p>5 行動変容にかかわる理論②（学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等） 北岡／入江</p>	<p>39 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学演習Ⅰ」</p> <p>担当教員 北岡英子、入江晶子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・公衆衛生看護学領域における基本的概念について実例を用いてプレゼンテーションができる。</p> <p>・公衆衛生看護学の対象への支援方法について実例を用いてプレゼンテーションができる。</p> <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <p>1 授業ガイダンス：授業概要、目的、 授業内容についてのガイダンス</p> <p>2 公衆衛生看護活動の基盤となる理論（健康概念・プライマリヘルスケア・ヘルスプロモーション）</p> <p>3 公衆衛生看護活動における保健行動にかかわる概念（ライフ・スキル、ヘルスリテラシー等）</p> <p>4 行動変容にかかわる理論①（学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等）</p> <p>5 行動変容にかかわる理論②（学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等）</p>

6 行動変容にかかわる理論③(学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等) <u>北岡/入江</u>	6 行動変容にかかわる理論③(学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等)
7 行動変容にかかわる理論④(学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等) <u>北岡/入江</u>	7 行動変容にかかわる理論④(学習理論、保健信念モデル、自己効力感、変化理論等)
8 対象アセスメント事例演習① <u>北岡/入江</u>	8 対象アセスメント事例演習①
9 対象アセスメントの検討 <u>北岡/入江</u>	9 対象アセスメントの検討
10 個人・家族を対象とした保健指導演習① <u>北岡/入江</u>	10 個人・家族を対象とした保健指導演習①
11 個人・家族を対象とした保健指導演習② <u>北岡/入江</u>	11 個人・家族を対象とした保健指導演習②
12 個人・家族を対象とした保健指導の検討 <u>北岡/入江</u>	12 個人・家族を対象とした保健指導の検討
13 集団・組織を対象とした保健指導演習① <u>北岡/入江</u>	13 集団・組織を対象とした保健指導演習①
14 集団・組織を対象とした保健指導演習② <u>北岡/入江</u>	14 集団・組織を対象とした保健指導演習②
15 集団・組織を対象とした保健指導の検討 <u>北岡/入江</u>	15 集団・組織を対象とした保健指導の検討
<u>41</u> ページ 「公衆衛生看護学演習Ⅱ」 担当教員 北岡英子(<u>15</u> 回)、入江晶子(<u>15</u> 回) 授業の到達目標 <u>1.</u> 公衆衛生看護に関わる保健・医療・福祉システムのトピックについて国内外の文献をクリティークし、プレゼンテーションすることができる。 <u>2.</u> 自己の研究課題を明確にし、研究方法を検討できる。 授業計画 授業内容 1 授業ガイダンス：授業概要、目的、 授業内容についてのガイダンス <u>北岡/入江</u> 2 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状①(健康格差) <u>北岡/入江</u> 3 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状②(健康危機管理) <u>北岡/入江</u> 4 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状③(虐待) <u>北岡/入江</u> 5 公衆衛生看護領域における量的研究方法① <u>北岡/入江</u> 6 公衆衛生看護領域における量的研究方法② <u>北岡/入江</u>	<u>40</u> ページ 「公衆衛生看護学演習Ⅱ」 担当教員 北岡英子、入江晶子 授業の到達目標 ・公衆衛生看護に関わる保健・医療・福祉システムのトピックについて国内外の文献をクリティークし、プレゼンテーションすることができる。 ・自己の研究課題を明確にし、研究方法を検討できる。 授業計画 授業内容 1 授業ガイダンス：授業概要、目的、 授業内容についてのガイダンス 2 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状①(健康格差) 3 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状②(健康危機管理) 4 公衆衛生看護領域における近年の トピックの現状③(虐待) 5 公衆衛生看護領域における量的研究方法① 6 公衆衛生看護領域における量的研究方法②

7	公衆衛生看護領域における質的研究方法①	<u>北岡／入江</u>	7	公衆衛生看護領域における質的研究方法①
8	公衆衛生看護領域における質的研究方法②	<u>北岡／入江</u>	8	公衆衛生看護領域における質的研究方法②
9	公衆衛生看護領域における文献クリティーク①	<u>北岡／入江</u>	9	公衆衛生看護領域における文献クリティーク①
10	公衆衛生看護領域における文献クリティーク②	<u>北岡／入江</u>	10	公衆衛生看護領域における文献クリティーク②
11	公衆衛生看護領域における文献クリティーク③	<u>北岡／入江</u>	11	公衆衛生看護領域における文献クリティーク③
12	研究テーマ・研究方法の検討①	<u>北岡／入江</u>	12	研究テーマ・研究方法の検討①
13	研究テーマ・研究方法の検討②	<u>北岡／入江</u>	13	研究テーマ・研究方法の検討②
14	研究テーマ・研究方法の検討③	<u>北岡／入江</u>	14	研究テーマ・研究方法の検討③
15	まとめ	<u>北岡／入江</u>	15	まとめ

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【入学者選抜】

5. 入学者選抜について、各試験・審査の評価基準や配分点が記載されていないため、アドミッション・ポリシーとの関連を踏まえ、明確に説明すること。【研究科共通】

(対応)

審査意見1を受け改めた博士前期課程のアドミッション・ポリシーと、入学者選抜の各試験・審査の評価基準と配分点の関連を説明する。

博士前期課程 入学者選抜試験・審査の評価基準と配分点

入学者選抜試験・審査	評価基準	配分点
筆記試験：英語	英語の読解力	20点
筆記試験：専門領域	専門領域における見識及び論述力	80点
面接試験及び出願書類審査	入学目的の明確さと学修意欲 専門領域に関する見識 論理的思考力・表現力	50点

アドミッション・ポリシーⅠにある「看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲」については、面接試験および出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、専門領域に関する見識から評価する。

アドミッション・ポリシーⅡにある「各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人」については、筆記試験と面接試験及び出願書類審査にて評価する。筆記試験：専門領域では、領域に関連した論述内容から専門領域における見識、論述力を評価する。筆記試験：英語では、保健医療・医学系の英語論文を用い、部分訳や要約などの設問にて英語の読解力を評価する。辞書は持ち込み可とする。また面接試験及び出願書類審査では、専門領域に関する見識、論理的思考力・表現力などを評価する。

アドミッション・ポリシーⅢにある「看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人」については、面接試験及び出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、専門領域に関する見識、論理的思考力・表現力などを評価する。

配分点は、英語の筆記試験 20 点、専門領域の筆記試験 80 点、面接試験及び出願書類審査を 50 点とする。

以上の筆記試験と面接試験及び出願書類審査の結果を総合的に判断し、選抜を行う。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (21、23～24 ページ)

新		旧									
<p>1. アドミッション・ポリシー</p> <p>本研究科の教育理念を達成し、教育者・研究者・実践者を育成するため、本学では以下のような要件を備えた学生を歓迎する。</p> <p>1) 博士前期課程</p> <p>Ⅰ.看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</p> <p>Ⅱ.各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人</p> <p>Ⅲ.看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人</p> <p>(略)</p> <p>1) 博士前期課程</p> <p><u>入学者選抜は、筆記試験と面接試験および出願書類審査にて行う。各試験内容および評価基準と配分点を以下に示す。</u></p> <p><u>博士前期課程 入学者選抜試験・審査の評価基準と配分点</u></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>入学者選抜試験・審査</th> <th>評価基準</th> <th>配分点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>筆記試験：英語</td> <td>・英語の読解力</td> <td>20点</td> </tr> <tr> <td>筆記試験：専門領域</td> <td>・専門領域における見識および論述力</td> <td>80点</td> </tr> </tbody> </table>		入学者選抜試験・審査	評価基準	配分点	筆記試験：英語	・英語の読解力	20点	筆記試験：専門領域	・専門領域における見識および論述力	80点	<p>1. アドミッション・ポリシー</p> <p>本研究科の教育理念を達成し、教育者・研究者・実践者を育成するため、本学では以下のような要件を備えた学生を歓迎する。</p> <p>1) 博士前期課程</p> <p>Ⅰ 看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</p> <p>Ⅱ <u>研究や各看護専門領域の基礎的知識・技術を有している人</u></p> <p>Ⅲ <u>地域や多職種との連携に関わり、チームの中で自ら意見を表明し行動できる人</u></p> <p>Ⅳ <u>看護学の研究者・教育者・実践者として高度な専門性をもって社会貢献できる人</u></p> <p>(略)</p> <p>1) 博士前期課程</p> <p><u>筆記試験、面接試験及び出願書類審査により、アドミッション・ポリシーに基づき総合的に評価する。筆記試験科目は外国語（英語論文1題、2問の設問にて読解力を問う、辞書持ち込み可）と専門領域（領域に関連する2問の設問にて論述力を問う）とする。面接試験及び出願書類では、学修意欲、適性及び研究計画等について確認する。</u></p>
入学者選抜試験・審査	評価基準	配分点									
筆記試験：英語	・英語の読解力	20点									
筆記試験：専門領域	・専門領域における見識および論述力	80点									

<p>面接試験及び出願書類審査</p>	<p>・ 入学目的の明確さと学修意欲 ・ 専門領域に関する見識 ・ 論理的思考力・表現力</p>	<p>50 点</p>	<p>アドミッション・ポリシー I にある「看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲」については、面接試験および出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、専門領域に関する見識から評価する。</p> <p>アドミッション・ポリシー II にある「各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人」については、筆記試験と面接試験及び出願書類審査にて評価する。筆記試験：専門領域では、領域に関連した論述内容から専門領域における見識、論述力を評価する。筆記試験：英語では、保健医療・医学系の英語論文を用い、部分訳や要約などの設問にて英語の読解力を評価する。辞書は持ち込み可とする。また面接試験及び出願書類審査では、専門領域に関する見識、論理的思考力・表現力などを評価する。</p> <p>アドミッション・ポリシー III にある「看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人」については、面接試験及び出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、専門領域に関する見識、論理的思考力・表現力などを評価する。</p> <p>配分点は、英語の筆記試験 20 点、専門領域の筆記試験 80 点、面接試験及び出願書類審査を 50 点とする。</p>
---------------------	--	-------------	---

<p>以上の筆記試験と面接試験及び出願書類 審査の結果を総合的に判断し、選抜を行 う。</p>	
---	--

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【入学者選抜】

6. アドミッション・ポリシーについて、「看護学の研究者・教育者・実践者として高度な専門性をもって社会貢献できる人」を掲げ、入学時に高度な専門性を求めている一方で、ディプロマ・ポリシーでは「看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・共同する基礎的能力を修得している」として、基礎的能力の修得が学位授与の条件となっており、ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーの整合性に疑義があるため、その妥当性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

審査意見 1~3 を受け、養成する人材像を「看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域との連携ができる人」と見直した。また、ディプロマ・ポリシーはⅠ.看護学の研究を遂行する基本的能力、Ⅱ.研究論文をクリティークしてエビデンスを現場に還元する能力、Ⅲ.看護教育の役割・機能に関する理論的基盤、Ⅳ.看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有している者とした。これに対し、アドミッション・ポリシーも見直し、Ⅰ.看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人、Ⅱ.各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人、Ⅲ.看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人とした。このように養成する人材像に基づき、ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーを定義しなおすことで、両者の整合性、妥当性を担保することができた。

(新旧対照表) ディプロマ・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 5~6 ページ)

新	旧
2) 博士前期課程 学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) は以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士 (看護学)」の学位を授与する。 <u>Ⅰ.看護学の研究を遂行する基本的能力を有している</u> <u>Ⅱ.研究論文をクリティークし、エビデンスを現場に還元する能力を修得している</u> <u>Ⅲ.看護教育の役割・機能に関する理論的基</u>	2) 博士前期課程 学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) は教育研究上の目的に基づき以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士 (看護学)」の学位を授与する。 博士前期課程のディプロマ・ポリシーを以下に示す。 <u>Ⅰ 修得した研究力をさらに進化させ、より卓越した研究へと継続できる能力を修得している</u>

<p><u>盤を修得している</u></p> <p>IV.<u>看護学の教育・研究・実践において、倫理的課題に対応する能力や多職種・地域と連携する能力を有している</u></p>	<p>II <u>修得した教育力を深め自身の教育能力の向上に努めるとともに看護教育の開発・向上に取り組む能力を修得している</u></p> <p>III <u>看護の実践・教育・研究における様々な倫理的課題に対応できる能力を修得している</u></p> <p>IV <u>専門領域の知識・教養を深めた看護専門職者として地域や多職種チームでの保健医療に貢献し寄与する能力を修得している</u></p> <p>V <u>看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を修得している</u></p>
---	---

(新旧対照表) アドミッション・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 21 ページ)

新	旧
<p>I. <u>看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</u></p> <p>II. <u>各看護専門領域の知識、論理的思考力、英語論文の読解力を有する人</u></p> <p>III. <u>看護学の教育・研究・実践に貢献することを志す人</u></p>	<p>I <u>看護実践の場で生じる事象や課題を科学的に解明する意欲のある人</u></p> <p>II <u>研究や各看護専門領域の基礎的知識・技術を有している人</u></p> <p>III <u>地域や多職種との連携に関わり、チームの中で自ら意見を表明し行動できる人</u></p> <p>IV <u>看護学の研究者・教育者・実践者として高度な専門性をもって社会貢献できる人</u></p>

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【教員組織】

7. 専任教員の年齢構成が著しく高齢に偏っていることから、教育研究の継続性を踏まえ、若手教員の採用計画など教員組織の将来構想を明確にするとともに、教員配置の適正化を図ること。

(対応)

定年退職する教員の補充を平均 55 歳以下の者とする(教育経験や研究業績によっては 40 歳未満も積極的に採用する) ことにより、開設時の大学院専任教員の平均年齢 64 歳は、博士前期・後期課程とも開設後 5 年目に 60 歳未満となる。**【別紙 3 「大学院教員の退職と補充計画」参照】**

また、現在博士の学位を持たない准教授の学位取得の奨励と論文指導を含む教育・研究マネジメント能力の醸成をサポートし、教授の定年退職を機に昇任を図る。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (25～26 ページ)

新	旧
<p>ケ 教員組織の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 教員の年齢構成と将来構想</p> <p>研究科開設時における本学の教員年齢は、博士前期課程では 65 歳以上は 8 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。また博士後期課程は、65 歳以上は 7 名、60 歳以上 65 歳未満は 1 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。開設後数年間は、安定した教員組織基盤において学生を学ばせるため、開設時の満年齢が 60 歳以上の者については、「湘南鎌倉医療大学大学院設置時における教員の定年の特例に関する規程」【資料 54】に基づいて対応することとする。しかし、数年以内に順次、定年を迎えて採用が必要になることから、教員の年齢の適正化のため、以下のように方針ならびに計画を定める。</p> <p>・定年退職する大学教員の補充にあたり、設置計画と同じ教員数を確保していく。</p>	<p>ケ 教員組織の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 教員の年齢構成と将来構想</p> <p>研究科開設時における本学の教員年齢は、博士前期課程では 65 歳以上は 8 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。また博士後期課程は、65 歳以上は 6 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。これは研究科開設時における教育の水準を保证するため、博士後期課程の論文指導を担当できる専任教員を配置した結果となっている。完成年次には本学の定年(65 歳)を迎える教員、または定年を超えている教員が博士前期課程は 9 人、博士後期課程は 8 名いることから、本学看護学研究科 設置のための専任教員で、開設時の満年齢が教員の定年による退職に対しては、教育・研究の継続性の維持を図るために、計画的・段階的に公募制によって適材の確保を図ることとする。定年退職となる教員</p>

- ・ 補充する研究科の教員については、平均 55 歳以下とし、教育経験や研究業績によっては 40 歳未満でも可とする。参考にしたように、開設時に平均年齢 64 歳である大学院専任教員の年齢は、博士前期・後期課程とも開設後 5 年目に 60 歳未満となる計画である。
- ・ 現在、博士の学位を持たない准教授の学位取得の促進と論文指導を含む教育・研究マネジメント能力の醸成をサポートし、教授の定年を機に昇任を図る。

(参考) 大学院教員の退職と補充計画

博士前期課程：設置後7年間の教員の退職と補充計画

年次	設置年	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	合計
和：西暦	令4-2022	令5-2023	令6-2024	令7-2025	令8-2026	令9-2027	令10-2028	
平均年齢	64.14	65.14	66.14	60.86	58.57	57.57	58.57	
在籍者数	14	14	14	10	9	8	6	
退職者数	0	0	0	4	5	6	8	
補充者数	0	0	0	4	5	6	8	
新合計教員数	14	14	14	14	14	14	14	

の後任は、原則として退職前に教員を補充することで対応し、設置計画と同じ専任教員数を確保することで、教育研究水準と教育研究体制を維持していく。また、将来に向けた教育研究水準の質の向上の観点から、中堅や若手教員の教育・研究力の育成を図るため、博士の学位未取得の教員の学位取得を奨励する。さらに、日々の講義や演習に加え、特別講義、研究計画書発表、論文発表などに中堅・若手教員が参加できるような機会を設ける。60 歳以上の者については、「湘南 鎌倉医療大学大学院設置時における教員の定年の特例に関する規程」

【資料 50】に基づいて対応することとする。

教員の定年による退職に対しては、教育・研究の継続性の維持を図るために、計画的・段階的に公募制によって適材の確保を図ることとする。定年退職となる教員の後任は、原則として退職前に教員を補充することで対応し、設置計画と同じ専任教員数を確保することで、教育研究水準と教育研究体制を維持していく。また、将来に向けた教育研究水準の質の向上の観点から、中堅や若手教員の教育・研究力の育成を図るため、博士の学位未取得の教員の学位取得を奨励する。さらに、日々の講義や演習に加え、特別講義、研究計画書発表、論文発表などに中堅・若手教員が参加できるような機会を設ける。

(改善事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【その他】

8. 管理運営体制について、教学運営全般に係る事項を審議するため看護学研究科委員会を設置するとの記載があるが、教学運営事項についての決定プロセスが不明確であるため、改めて明確に説明するとともに、併せて学内規定を提出すること。【研究科共通】

(対応)

看護学研究科の教学運営事項は、定例で月1回開催される研究科委員会で審議し、出席した構成員の過半数（構成員の2/3以上の出席をもって成立）の賛成をもって決定する。また、「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程」（設置認可申請書「6.学則」10・11ページ）の第4条に記された審議事項について、研究科の運営を円滑にするために運営委員会を別に設けることができる。【別紙4「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程」参照】

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (28～29ページ)

新	旧
<p>1.管理運営体制</p> <p>看護学研究科の管理運営のため、研究科長を置き、看護学研究科委員会（以下「研究科委員会」）を設置する。</p> <p>研究科委員会は、研究科担当の専任教員（教授・准教授）をもって組織し、学生の入学及び課程修了、学位授与に関することをはじめ、教育課程の編成や教員の教育研究業績の審査等、学長が決定する看護学研究科における教学運営全般に係る事項を審議するため、原則として月1回開催する。</p> <p>その他、学年暦に定める授業期間や教育課程における単位計算、成績評価方法、学籍異動の管理・運用等に関しては学部学則の規定を準用する。</p> <p>また、「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程」（設置認可申請書「6.学則」10・11ページ）の第4条に記された審議事項について、研究科の運営を円滑にするために運営委員会を別に設けることができる。</p>	<p>1.管理運営体制</p> <p>看護学研究科の管理運営のため、研究科長を置き、看護学研究科委員会（以下「研究科委員会」）を設置する。</p> <p>研究科委員会は、研究科担当の専任教員（教授・准教授）をもって組織し、学生の入学及び課程修了、学位授与に関することをはじめ、教育課程の編成や教員の教育研究業績の審査等、学長が決定する看護学研究科における教学運営全般に係る事項を審議するため、原則として月1回開催する。</p> <p>その他、学年暦に定める授業期間や教育課程における単位計算、成績評価方法、学籍異動の管理・運用等に関しては学部学則の規定を準用する。</p> <p>また、学部教授会と併せ、大学の教育・研究等に関し、学校法人との連携調整を図るため大学運営会議を置く。</p>

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (M)

【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】

9. 採用意向アンケート調査について、審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるものの、本研究科は、教育課程を見る限り、看護系大学・大学院の教員不足を背景に、看護系教育者及び研究者を養成するものと見受けられるが、調査対象に、病院や介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所・保健福祉事務所等の教育機関・研究機関以外の施設等が含まれており、調査結果の妥当性を判断することができない。養成する人材像を踏まえ、適切な調査対象を設定した上で、本研究科修了生のニーズがあることを改めて明確に説明すること。

【研究科共通】

(対応)

本研究科博士前期課程が養成する人材像については、「研究的視点を持った実践者としての能力をさらに進化させ看護専門職者として地域や多職種連携におい保健医療の発展に貢献できる人材」として採用意向アンケート調査を実施したが、審査意見1を踏まえ、「看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域と連携ができる人」と修正を加えた。

上記の本研究科博士前期課程が養成する人材の進路について、①看護系教育者・研究者として教育機関・研究機関、②リサーチエビデンスを現場で活用できる看護職として医療・福祉・保健機関を想定している。①については近隣の看護系大学、②については神奈川県内の病院、介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所、保健福祉事務所を調査対象と設定して分析する。

採用意向アンケート調査の集計結果では、本研究科の修了生を「採用したい」が26件、「採用を検討したい」が77件だった。さらに、博士前期課程修了生の採用可能人数は「1人」が40件、「2人」が8件、「人数は未確定」が52件だった。

採用意向アンケート調査の結果を調査対象別(問2)にクロス集計【別紙5「【資料7】採用意向アンケート調査 問2とのクロス集計」参照】したところ、①大学4件(うち神奈川県内で3件)、②病院84件、介護保険施設84件、訪問看護ステーション79件の計247件から回答があった。

①大学については、本研究科の修了生を「採用したい」が2校、「採用を検討したい」が2校だった。さらに、博士前期課程修了者の採用可能人数は「1人」が1校、「人数は未確定」が3校だった。したがって、近隣の大学から教員又は助手として採用されるニーズがあるといえる。

②病院、介護保険施設、訪問看護ステーションについては、本研究科の修了生を「採用したい」が24件、「採用を検討したい」が73件だった。さらに、博士前期課程修了者の採用可能人数は「1人」が39件、「2人」が8件、「人数は未確定」が47件だった。したがって、近隣の病院、介護保険施設、訪問看護ステーションから、看護職として採用されるニーズが

あるといえる。

なお、調査の客観性の観点から、本学は採用意向アンケート調査の回答者に含まれていない。しかしながら、本学では、本研究科博士前期課程の修了生を専任教員又は助手として毎年1名程度継続的に採用することを計画している。

以上より、本研究科博士前期課程の修了生について継続的に入学定員6名を上回るのニーズがあると考えられる。

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類

新	旧
<p>(6 ページ)</p> <p>(2) 人材需要の動向等社会の要請</p> <p>①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的 (概要)</p> <p><u><博士前期課程の養成する人材像></u></p> <p><u>看護学における研究過程の遂行、リサーチエビデンスの教育・実践への活用、人間の生涯及び地域に対する看護の課題解決のために多職種・地域と連携ができる人</u></p>	<p>(5 ページ)</p> <p>(2) 人材需要の動向等社会の要請</p> <p>①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的 (概要)</p> <p><u><博士前期課程の目的></u></p> <p><u>博士前期課程の教育上の理念及び目的は、研究的視点を持った実践者としての能力をさらに進化させ、看護専門職者として地域や多職種連携において保健医療の発展に貢献できる能力を修得した人材を育成することである。また研究課題を明確にするために各分野における諸理論、研究動向、課題等を概観し、理論の構築や、システム構築、ケア開発等に向けて考究するとともに看護学の研究者・教育者・実践者として国内外の様々なコミュニティと連携・協働する基礎的能力を有する人材を育成することである。</u></p>
<p>(9 ページ)</p> <p>オ 採用意向アンケート調査 (【資料4】調査②) (略)</p> <p><u><博士前期課程の修了生のニーズの分析></u></p> <p><u>本研究科博士前期課程が養成する人材の進路について、①看護系教育者・研究者として教育機関・研究機関、②リサーチエビデンスを現場で活用できる看護職として医療・福祉・保健機関を想定している。①については近隣の看護系大学、②については神奈川県内の病院、介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所、保健福祉事務所を調査対象と設</u></p>	<p>(8 ページ)</p> <p>オ 採用意向アンケート調査 (【資料4】調査②) (略)</p> <p><u><調査結果></u></p> <p><u>上記調査において、回答のあった260件のうち、湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科看護学専攻の修了者を採用したいか質問したところ、「採用したい」が26件(10.0%)、「採用を検討したい」が77件(29.6%)あり、計103件(39.6%)の機関・施設が採用意欲を示した。</u></p> <p><u>さらに、「採用したい」または「採用を検討した</u></p>

<p>定して分析する。</p> <p>採用意向アンケート調査の集計結果では、本研究科の修了生を「採用したい」が 26 件、「採用を検討したい」が 77 件だった。さらに、博士前期課程修了生の採用可能人数は「1 人」が 40 件、「2 人」が 8 件、「人数は未確定」が 52 件だった。</p> <p>採用意向アンケート調査の結果を調査対象別（問 2）にクロス集計【資料 7】したところ、①大学 4 件（うち神奈川県内で 3 件）、②病院 84 件、介護保険施設 84 件、訪問看護ステーション 79 件の計 247 件から回答があった。</p> <p>①大学については、本研究科の修了生を「採用したい」が 2 校、「採用を検討したい」が 2 校だった。さらに、博士前期課程修了者の採用可能人数は「1 人」が 1 校、「人数は未確定」が 3 校だった。したがって、近隣の大学から教員又は助手として採用されるニーズがあるといえる。</p> <p>②病院、介護保険施設、訪問看護ステーションについては、本研究科の修了生を「採用したい」が 24 件、「採用を検討したい」が 73 件だった。さらに、博士前期課程修了者の採用可能人数は「1 人」が 39 件、「2 人」が 8 件、「人数は未確定」が 47 件だった。したがって、近隣の病院、介護保険施設、訪問看護ステーションから、看護職として採用されるニーズがあるといえる。</p> <p>なお、調査の客観性の観点から、本学は採用意向アンケート調査の回答者に含まれていない。しかしながら、本学では、本研究科博士前期課程の修了生を専任教員又は助手として毎年 1 名程度継続的に採用することを計画している。</p> <p>以上より、本研究科博士前期課程の修了生について継続的に入学定員 6 名を上回るのニーズがあると考えられる。</p>	<p>い」と回答した 103 機関・施設に対して、採用可能人数を質問したところ、博士前期課程が合計 108 人、博士後期課程が合計 104 人となった。</p>
---	--

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【設置の趣旨・目的等】

1. ディプロマ・ポリシーに掲げる看護学の研究者・教育者・実践者として修得する能力に関する記述が一般的な記述にとどまっており、明確ではないことや、カリキュラムが養成を目指す高度な看護専門職の養成に対応するものにはなっていないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーとの関係が不明確であるため、それらの妥当性や整合性を判断することができない。このため、ディプロマポリシーにおいて修得する能力を明確にした上で、養成する人材と3つのポリシーの整合性を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像と3つのポリシーの整合性について、図や表を用いて明確に説明すること。【研究科共通】

(対応)

本研究科博士後期課程については、研究者・教育者の育成を目指すものである。審査意見1. を踏まえ、養成する人材像、3ポリシーの表現・内容を見直し、各ポリシーの妥当性やポリシー間の整合性がとれるように修正した。

【別紙1「湘南鎌倉医療大学看護学研究科の養成する人材像及び3つのポリシー」参照】

当初の養成する人材像では「幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のためリーダーシップをとる能力を有する人材」としていた。これを「看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人」とし、より具体的に研究者・教育者を目指していること、また、その役割を通して研究成果等を発信できることを重視した人材像とした。

ディプロマ・ポリシーは、当初、Ⅰで研究課題を見出し自立した研究能力、Ⅱでリーダーシップをとる能力、Ⅲで社会における健康課題に対する社会システムの変革・構築による貢献能力、Ⅳで看護学教育の理論構築や教育開発への寄与能力を挙げていた。養成する人材像の、「看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力」に対応するディプロマ・ポリシーとして「Ⅰ. 広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力を修得している」とした。「人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のための教育・研究を通じた発信」に対応するディプロマ・ポリシーとして「Ⅱ. 看護実践の向上に貢献する研究成果を公表し社会に還元する能力を修得している」とした。養成する人材像すべてにかかるディプロマ・ポリシーとして「Ⅲ. 看護研究者として、学際的な協働・連携を推進できる能力を修得している」とした。当初のポリシーⅣは、養成する人材像から適切ではないと判断し、削除した。以上のように養成する人材像とディプロマ・ポリシーの関係及びディプロマ・ポリシーにおいて修得する能力を明確化した。

カリキュラム・ポリシーについては、養成する人材像、他のポリシーと整合しているため、Ⅰは変更しなかった。ただし、当初のⅡを分割し、Ⅱで専門科目の方針、Ⅲで研究指導の方針を示すよう整理し、改めた。

アドミッション・ポリシーは、当初、Ⅰで研究・教育への関心と探求・研鑽の意欲、Ⅱで専門領域の精通知識、Ⅲで柔軟な思考力・発想力・表現力と研究活動の推進、Ⅳで看護学の研究者・教育者・実践者としての社会貢献を求めていた。当初のⅠ及びⅡ、Ⅳを整理・統合し、「Ⅰ.看護学の教育・研究に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人」とした。当初のⅢは、「Ⅱ.研究を遂行する力として論理的思考、表現力、英語論文の批判的読解力を有する人」とし、より具体的な表現に改めた。以上のように、アドミッション・ポリシーについても養成する人材像並びに他のポリシーとの整合性をとれるようにした。

以上より、本課程の養成する人材像と3つのポリシーは整合性がとれている。

(新旧対照表) 養成する人材像 (設置の趣旨等を記載した書類6ページ)

新	旧
看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、 <u>人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人の養成</u> を目指す。	幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、 <u>看護の質の改善・向上のためのリーダーシップをとる能力を有し社会の変革やシステムの構築に寄与するとともに看護学教育の発展と看護学教育の質向上に取り組み、地域の保健・医療に貢献していく人材の育成</u> を目指す。

(新旧対照表) ディプロマ・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類6ページ)

新	旧
以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士(看護学)」の学位を授与する。 Ⅰ. <u>広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力を修得している</u> Ⅱ. <u>看護実践の向上に貢献する研究成果を公表し社会に還元する能力を修得している</u>	以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士(看護学)」の学位を授与する。 Ⅰ <u>幅広い視野と深い学識を基盤に看護学における研究課題を見出し自立して研究できる能力を修得している</u> Ⅱ <u>人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のためリーダーシップをとる能力を修得している</u>

<p>III. <u>看護研究者として、学際的な協働・連携を推進</u>できる能力を修得している</p>	<p>III <u>社会における健康課題に対し統合的かつ柔軟な判断力・思考力をもって社会システムの<u>変革・構築に寄与し貢献</u>できる能力を修得している</u></p> <p>IV <u>看護学教育の学問的体系を理論的に構築し教育開発に寄与する能力を修得している</u></p>
--	--

(新旧対照表) カリキュラム・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 11~12 ページ)

新	旧
<p><u>教育課程は「共通科目」と「専門科目」で編成し、専門科目に「生涯発達看護学分野」と「広域看護学分野」の2つを置く。教育・学習方法は、講義及び演習を中心とする。学修成果は、授業科目では到達目標と評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による博士學位論文審査・最終試験により評価する。</u></p> <p>I. <u>「共通科目」は自立して研究できるようになるための研究方法や英語論文の執筆の能力、研究能力の育成に必要な理論構築に資する科目を配置する</u></p> <p>II. <u>「専門科目」は国内外の学術誌や各看護学領域の実践に関する教育・研究を通じて看護学の発展に貢献できる能力を修得するための科目を配置する</u></p> <p>III. <u>研究指導を受け学術的意義のある研究課題を見出し、自立的・計画的・持続的に博士論文を作成する科目を配置する</u></p>	<p><u>専門分野は「生涯発達看護学分野」「広域看護学分野」からなる2分野とし、教育課程は「共通科目」と2分野の「専門科目」により編成する。</u></p> <p>I <u>共通科目には自立して研究できるようになるための研究方法や英語論文の執筆の能力、<u>ライティング技術</u>を培うために修得する科目、研究能力の育成に必要な理論構築に資する科目を配置する。</u></p> <p>II <u>専門分野の各看護学領域の専門科目には国内外の学術誌各看護学領域の実践に関する教育・研究を通じて看護学の発展に貢献できる能力を修得するための科目を配置する。<u>研究指導を受け博士論文を作成する科目を配置する。</u></u></p> <p><u>学修成果の評価については、授業科目では到達目標と成績評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による修士學位論文審査・最終試験により評価する。</u></p>

(新旧対照表) アドミッション・ポリシー (設置の趣旨等を記載した書類 21 ページ)

新	旧
<p>I. <u>看護学の教育・研究</u>に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人</p> <p>II. <u>研究を遂行する力として論理的思考、表現力、英語論文の批判的読解力を有する人</u></p>	<p>I. <u>看護学の研究・教育</u>に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人</p> <p>II. <u>自身の専門領域に精通した知識・技術を有している人</u></p> <p>III. <u>柔軟な思考力・発想力・表現力を持ち自ら研究活動を推進できる人</u></p> <p>IV. <u>看護学の学問的発展・変革に貢献できる人</u></p>

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【設置の趣旨・目的等】

2. 博士前期課程と博士後期課程を同時に設置する理由として、両課程の相互交流による双方の学修内容を深めることや、学部生のTAとして授業を補佐する役割等が挙げられているが、本来それぞれの課程において学ぶべき学修内容や教育効果の観点からの説明がなされていないため、各課程のカリキュラムの連動性や連続性を含めて、明確に説明すること。【研究科共通】

(対応)

連続性を含め、両課程が同時に設置されていることによる学修内容や教育効果の観点から、下記の説明を加えることとする。

一点目は、研究の継続性が得られることである。将来、教育者や研究者になることを目指して前期課程を受験し学修しようとする者にとって、後期課程を備えた研究科であることは研究課題の選択と継続的な研究活動にかかわる重要事項である。前期課程で研究の基礎を学び、後期課程への進学後は、連続して一貫した研究指導を受けながら、自立して研究する能力を育むことができる。本学の研究科では、人間の生涯と地域での生活と深くかかわる健康に関し、看護実践の場をよく理解し、教育・研究できる人材養成を目指しており、両課程を通した学修は連動し増幅する教育効果が期待できる。

二点目は、本学の博士の学位を持たない教員の博士後期課程進学へのニーズがあり、これに応えることが大学としての喫緊の課題となっていることである。前期課程だけでなく後期課程の設置をすることで中堅、若手教員の学位取得を促し、学部学生の教育の質の向上につながり、教員は研究成果の発信力、研究指導力を身につけられると考える。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (7~8 ページ)

新	旧
1. <u>研究の継続性が得られることである。将来、教育者や研究者になることを目指して前期課程を受験し学修しようとする者にとって、後期課程を備えた研究科であることは研究課題の選択と継続的な研究活動にかかわる重要事項である。前期課程で研究の基礎を学び、後期課程への進学後は、連続して一貫した研究指導を受けながら、自立して研究する能力を育むことができる。本学の研究科では、人間の生涯と地域での生活と深くかかわ</u>	1. 博士前期課程・博士後期課程の学生には開講期間中にディスカッション、相互交流を図る学修の機会を設定し看護学探求の面白さや、看護の奥深さを実感し双方の学修内容を深められることが期待できる。博士後期課程があることは博士前期課程の学生の学修において先の見通しが立ち学修意欲にもつながる。 2. 本研究科で看護の教育、研究において継続的に研鑽し続ける人を育成することは、本学の教育理念や目的を理解し本学

<p><u>る健康に関し、看護実践の場をよく理解し、教育・研究できる人材養成を目指しており、両課程を通した学修は連動し増幅する教育効果が期待できる。</u></p> <p>2. <u>本学の博士の学位を持たない教員の博士後期課程進学へのニーズがあり、これに応えることが大学としての喫緊の課題となっていることである。前期課程だけでなく後期課程の設置をすることで中堅、若手教員の学位取得を促し、学部学生の教育の質の向上につながり、教員は研究成果の発信力、研究指導力を身につけられると考える。</u></p> <p>3. <u>博士前期課程・博士後期課程の学生には開講期間中にディスカッション、相互交流を図る学修の機会を設定し看護学探求の面白さや、看護の奥深さを実感し双方の学修内容を深められることが期待できる。博士後期課程があることは博士前期課程の学生の学修において先の見通しが立ち学修意欲にもつながる。</u></p> <p>4. <u>学部開設3年次に看護学研究科を開設することにより、教育力育成の一環として例えば学部生の「TA」として授業を補助し、看護職を目指す学部生の教育内容とともに現代の若者の気質・特性も理解できる機会となる。学部生にとっては生涯にわたって研鑽し続ける大学院生を目の当たりにし自身のキャリア構築のモデルとなり学修の機会となる。院生・学部生双方にとって有益な機会となる効果が期待できる。</u></p>	<p>に愛着を持って後輩を育成できる教員の確保や教育の質の担保に繋がる。修士号を持つ教員志望者に対して本学で博士号を取得する課程を開設する必要がある</p> <p>3. <u>博士後期課程を同時に設置し連関づけられた教育課程が構築されていることにより両課程の学生に、より学びの深い学修・研究環境を提供できる。</u></p> <p>4. <u>学部開設3年次に看護学研究科を開設することにより、教育力育成の一環として例えば学部生の「TA」として授業を補助し、看護職を目指す学部生の教育内容とともに現代の若者の気質・特性も理解できる機会となる。学部生にとっては生涯にわたって研鑽し続ける大学院生を目の当たりにし自身のキャリア構築のモデルとなり学修の機会となる。院生・学部生双方にとって有益な機会となる効果が期待できる。</u></p>
--	--

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【教育課程等】

3. 審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、審査意見1への対応を踏まえて、本研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明すること。また、必要に応じて適切に改めること。【研究科共通】

(対応)

審査意見1. への対応として、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係の明確化をはかった。審査意見3. を踏まえ、本学研究科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識等に係る教育が網羅され、体系的が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明する。

博士後期課程の養成する人材像に対し、整合性がとれるようディプロマ・ポリシーの内容・表現を修正した。また、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーを達成するために必要な教育課程について、カリキュラム・ポリシーの表記を整え、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関連を明確化した。【別紙6「教育課程と3ポリシーの関係：博士後期課程」参照】

本学研究科の博士後期課程では、看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人を養成する。

そのため、Ⅰ.広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力、Ⅱ.看護実践の向上に貢献する研究成果を公表し社会に還元する能力、Ⅲ.看護研究者として、学際的な協働・連携を推進できる能力を有し、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士(看護学)」の学位を授与することを卒業認定・学位授与の方針とする。

これらを可能にするため、自立して研究できるようになるための研究方法や英語論文の執筆の能力、研究能力の育成に必要な理論構築に資する「共通科目」と、国内外の学術誌や各看護学領域の実践に関する教育・研究を通じて看護学の発展に貢献できる能力を修得するための「専門科目」で編成し、専門科目に「生涯発達看護学分野」と「広域看護学分野」の2つを置く。研究指導を受け学術的意義のある研究課題を見出し、自律的・計画的・持続的に博士論文を作成する科目を配置する。講義及び演習を中心とした教育・学習方法とし、到達目標と評価基準を明記して学修成果を評価する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (6 ページ、11～12 ページ)

新	旧
<p>ア 設置の趣旨及び必要性</p> <p>4. 養成する人材の考え方及びディプロマ・ポリシー</p> <p>3) 博士後期課程</p> <p><u>看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人の養成を目指す。博士後期課程のディプロマ・ポリシーを以下に示す。学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)は教育研究上の目的に基づき、以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士(看護学)」の学位を授与する。</u></p> <p><u>I. 広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力を修得している</u></p> <p><u>II. 看護実践の向上に貢献する研究成果を公表し社会に還元する能力を修得している</u></p> <p><u>III. 看護研究者として、学際的な協働・連携を推進できる能力を修得している</u></p>	<p>ア 設置の趣旨及び必要性</p> <p>4. 養成する人材の考え方及びディプロマ・ポリシー</p> <p>3) 博士後期課程</p> <p><u>幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、看護の質の改善・向上のためのリーダーシップをとる能力を有し社会の変革やシステムの構築に寄与するとともに看護学教育の発展と看護学教育の質向上に取り組み、地域の保健・医療に貢献していく人材の育成を目指す。学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)は教育研究上の目的に基づき以下のような能力を培い、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士(看護学)」の学位を授与する。</u></p> <p><u>博士後期課程のディプロマ・ポリシーを以下に示す。</u></p> <p><u>I 幅広い視野と深い学識を基盤に看護学における研究課題を見出し自立して研究できる能力を修得している</u></p> <p><u>II 人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のためリーダーシップをとる能力を修得している</u></p> <p><u>III 社会における健康課題に対し統合的かつ柔軟な判断力・思考力をもって社会システムの変革・構築に寄与し貢献できる能力を修得している</u></p> <p><u>IV 看護学教育の学問的体系を理論的に構築し教育開発に寄与する能力を修得している</u></p>
<p>エ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>3 博士後期課程</p> <p>博士前期課程で培った研究能力をさらに</p>	<p>エ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>3 博士後期課程</p> <p>博士前期課程で培った研究能力をさらに</p>

<p>発展させ、幅広い視野と深い学識を<u>基盤に</u>自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人を養成する教育課程とする。</p> <p>以下に博士後期課程のカリキュラム・ポリシーを示す。「<u>湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科の養成する人材像と3つのポリシー</u>」【資料5】「<u>教育課程と3ポリシーの関係：博士後期課程</u>」【資料8】</p> <p>教育課程は「<u>共通科目</u>」と「<u>専門科目</u>」で編成し、<u>専門科目に「生涯発達看護学分野」と「広域看護学分野」の2つを置く。</u>教育・学習方法は、<u>講義及び演習を中心とする。</u>学修成果は、<u>授業科目では到達目標と評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による博士学位論文審査・最終試験により評価する。</u></p> <p>I. 「<u>共通科目</u>」は自立して研究できるようになるための研究方法や英語論文の執筆の能力、研究能力の育成に必要な理論構築に資する科目を配置する</p> <p>II. 「<u>専門科目</u>」は国内外の学術誌や各看護学領域の実践に関する教育・研究を通じて看護学の発展に貢献できる能力を修得するための科目を配置する</p> <p>III. <u>研究指導を受け学術的意義のある研究課題を見出し、自律的・計画的・持続的に博士論文を作成する科目を配置する</u></p>	<p>発展させ、幅広い視野と深い学識を<u>もって</u>自立して研究する能力を修得し、看護の質の改善・向上、<u>看護専門職の人材育成に必要な看護学教育のためにリーダーシップをとる能力を培う。</u>それぞれの分野における<u>理論の構築や、システム構築、ケア開発等に寄与する能力を有する人材を育成するための教育課程を編成する。</u></p> <p>以下に博士後期課程のカリキュラム・ポリシーを示す。博士前期課程における教育を基礎として、自立して研究できる人材、教育・研究を通じて看護実践及び看護学の発展に貢献できる人材を育成する。</p> <p>専門分野は「<u>生涯発達看護学分野</u>」「<u>広域看護学分野</u>」からなる2分野とし、教育課程は「<u>共通科目</u>」と2分野の「<u>専門科目</u>」により編成する。</p> <p>I <u>共通科目</u>には自立して研究できるようになるための研究方法や英語論文の執筆の能力、ライティング技能を培うために修得する科目、研究能力の育成に必要な理論構築に資する科目を配置する。</p> <p>II <u>専門分野の各看護学領域の専門科目</u>には国内外の学術誌各看護学領域の実践に関する教育・研究を通じて看護学の発展に貢献できる能力を修得するための科目を配置する。<u>研究指導を受け博士論文を作成する科目を配置する。</u></p> <p><u>学修成果の評価については、授業科目では到達目標と成績評価基準をシラバスに明示し総合的に評価し、研究では主査1名と副査2名の審査委員による博士学位論文審査・最終試験により評価する。</u></p>
---	---

<p>学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連から、ディプロマ・ポリシーに関連が強い授業科目は以下のとおりである。</p> <p>1) 博士後期課程 共通科目</p> <p><u>広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅠと強く関連する科目として「看護学研究法」「英語論文演習」「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」「理論看護学」を設定する。看護研究者として、学際的な協働・連携を推進できる能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅢと強く関連する科目として「地域生活看護論Ⅱ」を設定する。</u></p> <p>2) 博士後期課程 専門科目</p> <p><u>広い視野と深い学識を基盤に、看護学の発展に向けた研究課題を見出し、自立して研究できる能力を修得するというディプロマ・ポリシーⅠと強く関連する科目として「リプロダクティブヘルス看護学特論 D」「リプロダクティブヘルス看護学演習 D」「小児看護学特論 D」「小児看護学演習 D」「成人看護学特論 D」「成人看護学演習 D」「老年看護学特論 D」「老年看護学演習 D」「在宅看護学特論 D」「在宅看護学演習 D」「公衆衛生看護学特論 D」「公衆衛生看護学演習 D」「看護学特別研究 D」を設定する。</u></p>	<p>学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連から、ディプロマ・ポリシーに関連が強い授業科目は以下のとおりである。</p> <p>1) 博士後期課程 共通科目</p> <p><u>共通科目ではディプロマ・ポリシーⅠの自立して研究できる能力を修得するために「看護学研究法」「英語論文演習」「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」「理論看護学」を設ける。ディプロマ・ポリシーⅡの看護の質の改善・向上のためリーダーシップをとる能力を修得するために「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」「地域生活看護論Ⅱ」「理論看護学」を設ける。ディプロマ・ポリシーⅢの社会における健康課題に対応し社会システムの変革・構築に寄与できる能力を培うために「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」「地域生活看護論Ⅱ」「英語論文演習」を設ける。ディプロマ・ポリシーⅣの看護学教育の開発に寄与できる能力を養うために「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」「理論看護学」を設ける。</u></p> <p>2) 博士後期課程 専門科目</p> <p><u>ディプロマ・ポリシーⅠの幅広い視野と深い学識を基盤に看護学における研究課題を見出し自立して研究できる能力を修得するために「リプロダクティブヘルス看護学特論 D」「リプロダクティブヘルス看護学演習 D」「小児看護学特論 D」「小児看護学演習 D」「成人看護学特論 D」「成人看護学演習 D」「老年看護学特論 D」「老年看護学演習 D」「在宅看護学特論 D」「在宅看護学演習 D」「公衆衛生看護学特論 D」「公衆衛生看護学演習 D」「看護学特別研究 D」を設ける。ディプロマ・ポリシーⅡの人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のためリ</u></p>
--	--

	<p>ーダーシップをとる能力を修得するため 「リプロダクティブヘルス看護学特論 D」 「リプロダクティブヘルス看護学演習 D」 「小児看護学特論 D」「小児看護学演習 D」 「成人看護学特論 D」「成人看護学演習 D」 「老年看護学特論 D」「老年看護学演習 D」 「在宅看護学特論 D」「在宅看護学演習 D」 「公衆衛生看護学特論 D」「公衆衛生看護学 演習 D」を設ける。ディプロマ・ポリシー Ⅲの社会における健康課題に対し統合的かつ 柔軟な判断力・思考力をもって社会シス テムの変革・構築に寄与する能力を修得す るために「リプロダクティブヘルス看護学 特論 D」「小児看護学特論 D」「成人看護学 特論 D」「老年看護学特論 D」「在宅看護学 特論 D」「公衆衛生看護学特論 D」を設ける。 ディプロマ・ポリシーⅣの看護学教育の学 問的体系を理論的に構築し教育開発に寄与 する能力を修得するために「リプロダクテ ィブヘルス看護学特論 D」「小児看護学特論 D」「成人看護学特論 D」「老年看護学特論 D」 「在宅看護学特論 D」「公衆衛生看護学特論 D」を設ける。</p>
--	---

(改善事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【教育課程等】

4. シラバスの記載について、複数名の教員で実施する科目における各教員の授業回数
示されていない科目がある、「到達目標」の書き方が統一されていないなど、不備が散
見されるため、網羅的に確認を行い、適切に改めること。【研究科共通】

(対応)

シラバスについて、複数名の教員で実施する科目において各回の担当者を記載した。加え
て、各教員が担当する授業回数を「担当教員」欄の教員名の後ろに () 書きで記載した。
また、「授業の到達目標」は番号を付して箇条書きとし、それぞれ「…ができる」という表
現に改め、到達目標を明確にした。

(新旧対照表) シラバス (授業計画)

新	旧
<p><u>46・47</u> ページ</p> <p>「看護学研究法」</p> <p>担当教員 黒田裕子(<u>15</u>回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 研究論文の知的クリティーク法を理解し、実際に知的クリティークを行うことができる。</p> <p><u>2.</u> 看護学領域における最新の研究論文に使用されている各種の研究手法を理解することができる。</p>	<p>45・46 ページ</p> <p>「看護学研究法」</p> <p>担当教員 黒田裕子</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>・</u> 研究論文の知的クリティーク法を理解し、実際に知的クリティークを行うことができる。</p> <p><u>・</u> 看護学領域における最新の研究論文に使用されている各種の研究手法を理解することができる。</p>
<p><u>48</u> ページ</p> <p>「英語論文演習」</p> <p>担当教員 田島祐規子(<u>15</u>回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 英語文章作成の基本的知識を確実にして、英語論文作成に必要な論理的文章構成及び適切な引用と参考文献の記述ができる。</p> <p><u>2.</u> 適切な単語・表現・英文構造などの言語使用について、論文作成途上で自己添削できる。</p>	<p><u>47</u> ページ</p> <p>「英語論文演習」</p> <p>担当教員 田島祐規子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>英語文章作成の基本的知識を確実にして、英語論文作成に必要な論理的文章構成及び適切な引用と参考文献の記述ができる<u>知識の修得を目的とする。また、適切な単語・表現・英文構造などの言語使用について、論文作成途上で自己添削できるスキルを身につけることも目的とする。</u></p>

<p>49 ページ</p> <p>「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子(3回)、黒田裕子(6回)、福島道子(1回)、北岡英子(1回)、和田美也子(1回)、小山幸代(1回)、眞鍋知子(1回)、米山雅子(1回)、西村あをい(1回)、野中淳子(1回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 概念分析の方法を理解し、自らの研究テーマの概念・理論の基盤を説明できる。</p> <p>2. 看護学の実践と研究における概念・理論の適用について理解することができる。</p>	<p>48 ページ</p> <p>「看護学の実践と研究 特講Ⅱ」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子、黒田裕子、福島道子、北岡英子、和田美也子、小山幸代、眞鍋知子、米山雅子、西村あをい、野中淳子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 概念分析の方法を理解し、自らの研究テーマの概念・理論の基盤を説明できる</p> <p>2. 看護学の実践と研究における概念・理論の適用について理解する</p>
<p>50 ページ</p> <p>「地域生活看護論Ⅱ」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代(8回)、福島道子(9回)、北岡英子(8回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 地域で暮らす高齢者の課題を明確にし、その解決方法について考えを深めることができる。また、高齢者社会における健康危機管理の実際を理解し、ケア介入のあり方を考察できる。</p>	<p>49 ページ</p> <p>「地域生活看護論Ⅱ」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代、福島道子、北岡英子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>地域で暮らす高齢者の課題を明確にし、その解決方法について考えを深めることができる。また、高齢者社会における健康危機管理の実際を理解し、ケア介入のあり方を考察できる。</p>
<p>51・52 ページ</p> <p>「理論看護学」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 紀元前から現代にいたる科学哲学の歴史の概要を理解することができる。</p> <p>2. 主要な科学哲学の理論を理解することができる。</p> <p>3. 看護理論の発展と科学哲学の関係を理解することができる。</p> <p>4. 主要な看護理論を批判的に分析することができる。</p> <p>5. 主要な中範囲理論を批判的に分析することができる。</p>	<p>50・51 ページ</p> <p>「理論看護学」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>・紀元前から現代にいたる科学哲学の歴史の概要を理解することができる</p> <p>・主要な科学哲学の理論を理解することができる</p> <p>・看護理論の発展と科学哲学の関係を理解することができる</p> <p>・主要な看護理論を批判的に分析することができる</p> <p>・主要な中範囲理論を批判的に分析することができる</p>

<p><u>53</u> ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子(<u>15 回</u>)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. リプロダクティブヘルスにおける問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する<u>ことができる。</u></p> <p>2. リプロダクティブヘルスにおける問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する<u>ことができる。</u></p>	<p><u>52</u> ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. リプロダクティブヘルスにおける問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する。</p> <p>2. リプロダクティブヘルスにおける問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する。</p>
<p><u>54</u> ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子(<u>15 回</u>)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビューする<u>ことができる。</u></p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を検討し、<u>記述することができる。</u></p>	<p><u>53</u> ページ</p> <p>「リプロダクティブヘルス看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>森明子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビューする。</p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を検討する。</p>
<p>55・<u>56</u> ページ</p> <p>「小児看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>野中淳子(<u>10 回</u>)、西村あをい(<u>5 回</u>)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 小児看護における問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する<u>ことができる。</u></p> <p>2. 小児看護における問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する<u>ことができる。</u></p>	<p><u>54</u>・55 ページ</p> <p>「小児看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>野中淳子、西村あをい</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 小児看護における問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する。</p> <p>2. 小児看護における問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する。</p>
<p><u>57</u> ページ</p> <p>「小児看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>野中淳子(<u>15 回</u>)、西村あをい(<u>15 回</u>)、米山雅子(<u>15 回</u>)</p>	<p><u>56</u> ページ</p> <p>「小児看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>野中淳子、西村あをい、米山雅子</p>

<p>授業の到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビューする<u>ことができる</u>。 2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>作成することができる</u>。 <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <table border="0"> <tr><td>1</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>2</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>3</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>4</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>5</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>6</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>7</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>8</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>9</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>10</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>11</td><td>研究計画の検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>12</td><td>研究計画の検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>13</td><td>研究計画の検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>14</td><td>研究計画の検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> <tr><td>15</td><td>研究計画の検討</td><td><u>野中／西村／米山</u></td></tr> </table>	1	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>	2	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>	3	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>	4	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>	5	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>	6	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>	7	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>	8	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>	9	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>	10	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>	11	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>	12	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>	13	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>	14	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>	15	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>	<p>授業の到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビューする。 2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>検討する</u>。 <p>授業計画</p> <p>授業内容</p> <table border="0"> <tr><td>1</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td></td></tr> <tr><td>2</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td></td></tr> <tr><td>3</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td></td></tr> <tr><td>4</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td></td></tr> <tr><td>5</td><td>先行研究論文の批判的吟味</td><td></td></tr> <tr><td>6</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td></td></tr> <tr><td>7</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td></td></tr> <tr><td>8</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td></td></tr> <tr><td>9</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td></td></tr> <tr><td>10</td><td>研究デザイン、方法論に関する検討</td><td></td></tr> <tr><td>11</td><td>研究計画の検討</td><td></td></tr> <tr><td>12</td><td>研究計画の検討</td><td></td></tr> <tr><td>13</td><td>研究計画の検討</td><td></td></tr> <tr><td>14</td><td>研究計画の検討</td><td></td></tr> <tr><td>15</td><td>研究計画の検討</td><td></td></tr> </table>	1	先行研究論文の批判的吟味		2	先行研究論文の批判的吟味		3	先行研究論文の批判的吟味		4	先行研究論文の批判的吟味		5	先行研究論文の批判的吟味		6	研究デザイン、方法論に関する検討		7	研究デザイン、方法論に関する検討		8	研究デザイン、方法論に関する検討		9	研究デザイン、方法論に関する検討		10	研究デザイン、方法論に関する検討		11	研究計画の検討		12	研究計画の検討		13	研究計画の検討		14	研究計画の検討		15	研究計画の検討	
1	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
2	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
3	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
4	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
5	先行研究論文の批判的吟味	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
6	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
7	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
8	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
9	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
10	研究デザイン、方法論に関する検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
11	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
12	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
13	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
14	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
15	研究計画の検討	<u>野中／西村／米山</u>																																																																																									
1	先行研究論文の批判的吟味																																																																																										
2	先行研究論文の批判的吟味																																																																																										
3	先行研究論文の批判的吟味																																																																																										
4	先行研究論文の批判的吟味																																																																																										
5	先行研究論文の批判的吟味																																																																																										
6	研究デザイン、方法論に関する検討																																																																																										
7	研究デザイン、方法論に関する検討																																																																																										
8	研究デザイン、方法論に関する検討																																																																																										
9	研究デザイン、方法論に関する検討																																																																																										
10	研究デザイン、方法論に関する検討																																																																																										
11	研究計画の検討																																																																																										
12	研究計画の検討																																																																																										
13	研究計画の検討																																																																																										
14	研究計画の検討																																																																																										
15	研究計画の検討																																																																																										
<p>58・59 ページ</p> <p>「成人看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する<u>ことができる</u>。 2. 急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する<u>ことができる</u>。 	<p>57・58 ページ</p> <p>「成人看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子</p> <p>授業の到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における問題や課題に対し、最新の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する。 2. 急性期看護学・回復期看護学・慢性期看護学に渡る幅広い成人看護学における問題や課題について、理論や概念を用いて分析的に理解する。 																																																																																										

<p><u>60</u> ページ</p> <p>「成人看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子(<u>15</u>回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビュー<u>することができる</u>。</p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>作成することができる</u>。</p>	<p><u>59</u> ページ</p> <p>「成人看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>黒田裕子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する研究論文の批判的検討を行い、先行研究をレビューする。</p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>検討</u>する。</p>
<p><u>61</u> ページ</p> <p>「老年看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代(<u>15</u>回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 老年期を生きる人々の健康・生活の課題解決に寄与する老年看護学の役割と特徴について説明できる。</p> <p><u>2.</u> 老年看護学分野における自らの関心テーマに関連する概念を取り上げ、概念分析を行うとともに、学問上の課題について考察できる。</p>	<p><u>60</u> ページ</p> <p>「老年看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>・</u> 老年期を生きる人々の健康・生活の課題解決に寄与する老年看護学の役割と特徴について説明できる。</p> <p><u>・</u> 老年看護学分野における自らの関心テーマに関連する概念を取り上げ、概念分析を行うとともに、学問上の課題について考察できる。</p>
<p><u>62</u> ページ</p> <p>「老年看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代(<u>15</u>回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>1.</u> 老年看護学研究分野に有用と考えられる研究デザインや研究方法について説明できる。</p> <p><u>2.</u> 自らの研究疑問に関する先行研究のシステムティックレビューの結果を踏まえ、今後の研究課題について論述できる。</p>	<p><u>61</u> ページ</p> <p>「老年看護学演習 D」</p> <p>担当教員</p> <p>小山幸代</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>・</u> 老年看護学研究分野に有用と考えられる研究デザインや研究方法について説明できる。</p> <p><u>・</u> 自らの研究疑問に関する先行研究のシステムティックレビューの結果を踏まえ、今後の研究課題について論述できる。</p>
<p><u>63・64</u> ページ</p> <p>「在宅看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>福島道子(<u>15</u>回)</p>	<p><u>62・63</u> ページ</p> <p>「在宅看護学特論 D」</p> <p>担当教員</p> <p>福島道子</p>

<p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の問題・課題に対し、自身の関心領域に焦点を当て、最新の内外の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する<u>ことができる</u>。</p> <p>2. 在宅看護の問題・課題について、自身の関心領域に焦点を当て、理論や概念を用いて分析的に理解する<u>ことができる</u>。</p>	<p>授業の到達目標</p> <p>1. 在宅看護の問題・課題に対し、自身の関心領域に焦点を当て、最新の内外の知見、エビデンスを踏まえて看護を論考する。</p> <p>2. 在宅看護の問題・課題について、自身の関心領域に焦点を当て、理論や概念を用いて分析的に理解する。</p>
<p>65・66 ページ</p> <p>「在宅看護学演習 D」</p> <p>担当教員 福島道子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する内外の研究論文の批判的検討を行う<u>ことができる</u>。</p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>作成することができる</u>。</p>	<p>64・65 ページ</p> <p>「在宅看護学演習 D」</p> <p>担当教員 福島道子</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. 関心領域の研究課題に関連する内外の研究論文の批判的検討を行う。</p> <p>2. 研究方法を検討し、自らの研究課題に応じた研究計画を<u>検討する</u>。</p>
<p>67 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学特論 D」</p> <p>担当教員 北岡英子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>文献</u>などから地域の対象や健康レベルに沿った健康課題とその要因について根拠をもって説明できる。</p> <p>2. <u>保健・医療・福祉</u>を統合した支援や地域ケアシステム構築へ向けた研究の方向性、方法について述べる<u>ことができる</u>。</p>	<p>66 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学特論 D」</p> <p>担当教員 北岡英子</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>文献</u>などから地域の対象や健康レベルに沿った健康課題とその要因について根拠をもって説明できる。</p> <p><u>保健・医療・福祉</u>を統合した支援や地域ケアシステム構築へ向けた研究の方向性、方法について述べる<u>ことができる</u>。</p>
<p>68 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学演習 D」</p> <p>担当教員 北岡英子(15回)</p> <p>授業の到達目標</p> <p>1. <u>国内外の文献</u>検討やフィールドワークから研究課題を抽出する<u>ことができる</u>。</p>	<p>67 ページ</p> <p>「公衆衛生看護学演習 D」</p> <p>担当教員 北岡英子</p> <p>授業の到達目標</p> <p><u>国内外の文献</u>検討やフィールドワークから研究課題を抽出する<u>ことができる</u>。</p>

<p>2. 博士論文の研究につながる知見および研究方法を探求することができる。</p>	<p>・博士論文の研究につながる知見および研究方法を探求することができる。</p>
---	---

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【入学者選抜】

5. 入学者選抜について、各試験・審査の評価基準や配分点が記載されていないため、アドミッション・ポリシーとの関連を踏まえ、明確に説明すること。【研究科共通】

(対応)

審査意見1を受け改めた博士後期課程のアドミッション・ポリシーと、入学者選抜の各試験・審査の評価基準と配分点の関連を説明する。

博士後期課程 入学者選抜試験・審査の評価基準と配分点

入学者選抜試験・審査	評価基準	配分点
筆記試験：英語	英語の読解力	40点
筆記試験：専門領域	専門領域における見識及び論述力	60点
面接試験及び出願書類審査	入学目的の明確さと学修意欲 研究・教育・専門領域に関する見識 研究テーマ及び研究計画 論理的思考力・表現力	50点

アドミッション・ポリシーⅠにある「看護学の教育・研究に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人」については、面接試験および出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、研究・教育・専門領域に対する見識、研究テーマ及び研究計画、論理的思考・表現力などから評価する。

アドミッション・ポリシーⅡにある「研究を遂行する力として論理的思考、表現力、英語論文の批判的読解力を有する人」については、筆記試験と面接試験及び出願書類審査にて評価する。筆記試験：専門領域では、領域に関連した論述内容から専門領域における見識、論述力を評価する。筆記試験：英語では、保健医療・医学系の英語論文を用い、部分訳や要約などの設問にて英語の読解力を評価する。辞書は持ち込み可とする。また面接試験及び書類審査では、研究・教育・専門領域に関する見識、研究テーマ及び研究計画、論理的思考・表現力などを評価する。

配分点は、英語の筆記試験 40 点、専門領域の筆記試験 60 点、面接試験及び出願書類審査を 50 点とする。

以上の筆記試験と面接試験及び出願書類審査の結果を総合的に判断し、選抜を行う。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (21～24 ページ)

新		旧									
<p>ク 入学者選抜の概要</p> <p>1. アドミッション・ポリシー</p> <p>本研究科の教育理念を達成し、教育者・研究者・実践者を育成するため、本学では以下のような要件を備えた学生を歓迎する。</p> <p>2) 博士後期課程</p> <p>I. <u>看護学の教育・研究に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人</u></p> <p>II. <u>研究を遂行する力として論理的思考、表現力、英語論文の批判的読解力を有する人</u></p> <p>(略)</p> <p>5. 選抜の方法</p> <p>2) 博士後期課程</p> <p><u>入学者選抜は、筆記試験と面接試験および出願書類審査にて行う。各試験内容および評価基準と配分点を以下に示す。</u></p> <p><u>博士後期課程 入学者選抜試験・審査の評価基準と配分点</u></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th><u>入学者選抜試験・審査</u></th> <th><u>評価基準</u></th> <th><u>配分点</u></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><u>筆記試験：英語</u></td> <td><u>・英語の読解力</u></td> <td><u>40点</u></td> </tr> <tr> <td><u>筆記試験：専門領域</u></td> <td><u>・専門領域における見識および論述力</u></td> <td><u>60点</u></td> </tr> </tbody> </table>		<u>入学者選抜試験・審査</u>	<u>評価基準</u>	<u>配分点</u>	<u>筆記試験：英語</u>	<u>・英語の読解力</u>	<u>40点</u>	<u>筆記試験：専門領域</u>	<u>・専門領域における見識および論述力</u>	<u>60点</u>	<p>ク 入学者選抜の概要</p> <p>1. アドミッション・ポリシー</p> <p>本研究科の教育理念を達成し、教育者・研究者・実践者を育成するため、本学では以下のような要件を備えた学生を歓迎する。</p> <p>2) 博士後期課程</p> <p>I. <u>看護学の研究・教育に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人</u></p> <p>II. <u>自身の専門領域に精通した知識・技術を有している人</u></p> <p>III. <u>柔軟な思考力・発想力・表現力を持ち自ら研究活動を推進できる人</u></p> <p>IV. <u>看護学の学問的発展・変革に貢献できる人</u></p> <p>(略)</p> <p>5. 選抜の方法</p> <p>2) 博士後期課程</p> <p><u>筆記試験、面接試験及び出願書類審査により、アドミッション・ポリシーに基づき総合的に評価する。筆記試験科目は外国語（英語論文1題、2問の設問にて読解力を問う、辞書持ち込み可）と専門領域（領域に関連する2問の設問にて論述力を問う）とする。面接試験及び出願書類審査では、学修意欲、適性や研究計画等について確認する。</u></p>
<u>入学者選抜試験・審査</u>	<u>評価基準</u>	<u>配分点</u>									
<u>筆記試験：英語</u>	<u>・英語の読解力</u>	<u>40点</u>									
<u>筆記試験：専門領域</u>	<u>・専門領域における見識および論述力</u>	<u>60点</u>									

<p>面接試験及び出願書類審査</p>	<p>・ 入学目的の明確さと学修意欲 ・ 研究・教育・専門領域に関する見識 ・ 研究テーマ及び研究計画 ・ 論理的思考力・表現力</p>	<p>50 点</p>
<p>アドミッション・ポリシー I にある「看護学の教育・研究に深い関心を持ち探求・研鑽し続ける意欲のある人」については、面接試験および出願書類審査にて、入学目的の明確さと学修意欲、研究・教育・専門領域に対する見識、研究テーマ及び研究計画、論理的思考・表現力などから評価する。</p> <p>アドミッション・ポリシー II にある「研究を遂行する力として論理的思考、表現力、英語論文の批判的読解力を有する人」については、筆記試験と面接試験及び出願書類審査にて評価する。筆記試験：専門領域では、領域に関連した論述内容から専門領域における見識、論述力を評価する。筆記試験：英語では、保健医療・医学系の英語論文を用い、部分訳や要約などの設問にて英語の読解力を評価する。辞書は持ち込み可とする。また面接試験及び書類審査では、研究・教育・専門領域に関する見識、研究テーマ及び研究計画、論理的思考・表現力などを評価する。</p> <p>配分点は、英語の筆記試験 40 点、専門領域の筆記試験 60 点、面接試験及び出願書類審査を 50 点とする。</p>		

<p>以上の筆記試験と面接試験及び出願書類 審査の結果を総合的に判断し、選抜を行 う。</p>	
---	--

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【教員組織】

6. 研究指導補助教員数について、大学院設置基準の規定を満たしていないため、適切に改めること。

(対応)

「看護学特別研究 D」の研究指導の判定が不可となった教員（准教授）に代わり、教育・研究業績の豊富な教授を補充する。

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【教員組織】

7. 専任教員の年齢構成が著しく高齢に偏っていることから、教育研究の継続性を踏まえ、若手教員の採用計画など教員組織の将来構想を明確にするとともに、教員配置の適正化を図ること。

(対応)

定年退職する教員の補充を平均 55 歳以下の者とする(教育経験や研究業績によっては 40 歳未満も積極的に採用する) ことにより、開設時の大学院専任教員の平均年齢 64 歳は、博士前期・後期課程とも開設後 5 年目に 60 歳未満となる。**【別紙 3 「大学院教員の退職と補充計画」 参照】**

また、現在博士の学位を持たない准教授の学位取得の奨励と論文指導を含む教育・研究マネジメント能力の醸成をサポートし、教授の定年退職を機に昇任を図る。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (25～26 ページ)

新	旧
<p>ケ 教員組織の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 教員の年齢構成と将来構想</p> <p>研究科開設時における本学の教員年齢は、博士前期課程では 65 歳以上は 8 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。また博士後期課程は、65 歳以上は 7 名、60 歳以上 65 歳未満は 1 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。開設後数年間は、<u>安定した教員組織基盤において学生を学ばせるため、開設時の満年齢が 60 歳以上の者については、「湘南鎌倉医療大学大学院設置時における教員の定年の特例に関する規程」【資料 54】に基づいて対応することとする。しかし、数年以内に順次、定年を迎えて採用が必要になることから、教員の年齢の適正化のため、以下のように方針ならびに計画を定める。</u></p> <p>・<u>定年退職する大学教員の補充にあたり、設置計画と同じ教員数を確保していく。</u></p>	<p>ケ 教員組織の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 教員の年齢構成と将来構想</p> <p>研究科開設時における本学の教員年齢は、博士前期課程では 65 歳以上は 8 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。また博士後期課程は、65 歳以上は 6 名、60 歳以上 65 歳未満は 2 名、50 歳以上 60 歳未満は 4 名となっている。<u>これは研究科開設時における教育の水準を保証するため、博士後期課程の論文指導を担当できる専任教員を配置した結果となっている。完成年次には本学の定年 (65 歳) を迎える教員、または定年を超えている教員が博士前期課程は 9 人、博士後期課程は 8 名いることから、本学看護学研究科設置のための専任教員で、開設時の満年齢が教員の定年による退職に対しては、教育・研究の継続性の維持を図るために、計画的・段階的に公募制によって適材の確保を図ることとする。定年退職となる教員の後任は、</u></p>

・補充する研究科の教員については、平均 55 歳以下とし、教育経験や研究業績によっては 40 歳未満でも可とする。参考に示したように、開設時に平均年齢 64 歳である大学院専任教員の年齢は、博士前期・後期課程とも開設後 5 年目に 60 歳未満となる計画である。

・現在、博士の学位を持たない准教授の学位取得の促進と論文指導を含む教育・研究マネジメント能力の醸成をサポートし、教授の定年を機に昇任を図る。

(参考) 大学院教員の退職と補充計画

博士後期課程：設置後7年間の教員の退職と補充計画

年次	設置年	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	合計
和：西暦	令4-2022	令5-2023	令6-2024	令7-2025	令8-2026	令9-2027	令10-2028	
平均年齢	64.42	65.42	66.42	60.92	58.08	57.83	58.83	
在籍者数	12	12	12	9	8	7	5	
退職者数	0	0	0	3	4	5	7	
補充者数	0	0	0	3	4	5	7	
新合計教員数	12	12	12	12	12	12	12	

原則として退職前に教員を補充することで対応し、設置計画と同じ専任教員数を確保することで、教育研究水準と教育研究体制を維持していく。また、将来に向けた教育研究水準の質の向上の観点から、中堅や若手教員の教育・研究力の育成を図るため、博士の学位未取得の教員の学位取得を奨励する。さらに、日々の講義や演習に加え、特別講義、研究計画書発表、論文発表などに中堅・若手教員が参加できるような機会を設ける。60 歳以上の者については、「湘南鎌倉医療大学大学院設置時における教員の定年の特例に関する規程」

【資料 50】に基づいて対応することとする。

教員の定年による退職に対しては、教育・研究の継続性の維持を図るために、計画的・段階的に公募制によって適材の確保を図ることとする。定年退職となる教員の後任は、原則として退職前に教員を補充することで対応し、設置計画と同じ専任教員数を確保することで、教育研究水準と教育研究体制を維持していく。また、将来に向けた教育研究水準の質の向上の観点から、中堅や若手教員の教育・研究力の育成を図るため、博士の学位未取得の教員の学位取得を奨励する。さらに、日々の講義や演習に加え、特別講義、研究計画書発表、論文発表などに中堅・若手教員が参加できるような機会を設ける。

(改善事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【その他】

8. 管理運営体制について、教学運営全般に係る事項を審議するため看護学研究科委員会を設置するとの記載があるが、教学運営事項についての決定プロセスが不明確であるため、改めて明確に説明するとともに、併せて学内規定を提出すること。【研究科共通】

(対応)

看護学研究科の教学運営事項は、定例で月1回開催される研究科委員会で審議し、出席した構成員の過半数（構成員の2/3以上の出席をもって成立）の賛成をもって決定する。また、「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程」（設置認可申請書「6.学則」10・11ページ）の第4条に記された審議事項について、研究科の運営を円滑にするために運営委員会を別に設けることができる。【別紙4「湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程」参照】

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (28～29ページ)

新	旧
<p>1.管理運営体制</p> <p>看護学研究科の管理運営のため、研究科長を置き、看護学研究科委員会（以下「研究科委員会」）を設置する。</p> <p>研究科委員会は、研究科担当の専任教員（教授・准教授）をもって組織し、学生の入学及び課程修了、学位授与に関することをはじめ、教育課程の編成や教員の教育研究業績の審査等、学長が決定する看護学研究科における教学運営全般に係る事項を審議するため、原則として月1回開催する。</p> <p>その他、学年暦に定める授業期間や教育課程における単位計算、成績評価方法、学籍異動の管理・運用等に関しては学部学則の規定を準用する。</p> <p>また、「<u>湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科委員会規程</u>」（設置認可申請書「6.学則」10・11ページ）の第4条に記された審議事項について、<u>研究科の運営を円滑にするために運営委員会を別に設けることができる。</u></p>	<p>1.管理運営体制</p> <p>看護学研究科の管理運営のため、研究科長を置き、看護学研究科委員会（以下「研究科委員会」）を設置する。</p> <p>研究科委員会は、研究科担当の専任教員（教授・准教授）をもって組織し、学生の入学及び課程修了、学位授与に関することをはじめ、教育課程の編成や教員の教育研究業績の審査等、学長が決定する看護学研究科における教学運営全般に係る事項を審議するため、原則として月1回開催する。</p> <p>その他、学年暦に定める授業期間や教育課程における単位計算、成績評価方法、学籍異動の管理・運用等に関しては学部学則の規定を準用する。</p> <p>また、<u>学部教授会と併せ、大学の教育・研究等に関し、学校法人との連携調整を図るため大学運営会議を置く。</u></p>

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】

9. 博士後期課程の学生確保の見通しについて、近隣の私立看護系大学院のうち博士後期課程の入学定員が未充足状況の大学がある中において、同時設置する博士前期課程との関係についての説明がなされていないなど、長期的かつ安定的に学生確保の見通しがあることについての根拠が不十分であり判断できない。客観的な根拠を明らかにした上で、改めて明確に説明すること。

(対応)

近隣の私立看護系大学院 3 校のうち博士後期課程の入学定員が未充足な大学院が 1 校あり、当該大学院は博士前期課程においても入学定員が未充足である。対して、博士後期課程の入学定員が充足している 2 校については、博士前期課程の入学定員も充足している。**【別紙 7 「【資料 2】近隣の私立看護系大学院の入学定員充足状況」参照】**したがって、博士後期課程の学生確保のためには、博士前期課程の定員充足が重要である。

また、入学定員が未充足の上記大学院は最寄駅からバスで 25 分の距離にあり、他大学院と比較して通学が不便である。本学は最寄駅から徒歩 6 分であり、最寄駅は大船駅から約 2 分、横浜駅から約 25 分と通学の便が良い。

本学においても、同時設置する博士前期課程の修了生が、博士後期課程に入学することを将来的には見込んでいる。博士前期課程の入学意向アンケート調査において、入学定員 6 名を上回る 27 名が入学を希望しており、博士前期課程の学生確保の見通しがあるといえる。しかしながら、博士前期課程の 1 期生が修了を迎えるまでの 2 年間は、他大学院の博士前期課程等を修了した学生のみで、本学の博士後期課程の入学者を確保しなければならない。

博士後期課程の入学意向アンケート調査において、修士の学位を有している 6 名（看護教員 3 名、病院勤務 2 名、その他 1 名）から「入学したい」との結果を得ている。**【別紙 8 「入学意向アンケート調査 問 13 で「入学したい」と回答した 6 人についてのクロス集計」参照】**

それに加えて、本学看護学部長が実施した本学専任教員及び助手への個別面談の結果では、博士の学位を持たない（修士の学位を持つ）2 名が本学大学院博士後期課程への進学を希望している。

したがって、博士後期課程の入学定員 3 名に対して合計 8 名の入学希望者を確認している。

以上より、博士後期課程において長期的かつ安定的に学生確保の見通しがあるといえる。

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類 (2 ページ)

新	旧
<p>(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取り組み状況</p> <p>①学生確保の見通し</p> <p>ア 定員充足の見込み</p> <p>(略)</p> <p><u>なお、【資料 2】において近隣の私立看護系大学院 3 校のうち博士後期課程の入学定員が未充足な大学院が 1 校あり、当該大学院は博士前期課程においても入学定員が未充足である。対して、博士後期課程の入学定員が充足している 2 校については、博士前期課程の入学定員も充足している。したがって、博士後期課程の学生確保のためには、博士前期課程の定員充足が重要である。</u></p> <p><u>また、入学定員が未充足の上記大学院は最寄駅からバスで 25 分の距離にあり、他大学院と比較して通学が不便である。本学は最寄駅から徒歩 6 分であり、最寄駅は大船駅から約 2 分、横浜駅から約 25 分と通学の便が良い。</u></p> <p><u>本学においても、同時設置する博士前期課程の修了生が、博士後期課程に入学することを将来的には見込んでいる。博士前期課程の入学意向アンケート調査 (【資料 4】) において、入学定員 6 名を上回る 27 名が入学を希望しており、博士前期課程の学生確保の見通しがあるといえる。しかしながら、博士前期課程の 1 期生が修了を迎えるまでの 2 年間は、他大学院の博士前期課程等を修了した学生のみで、本学の博士後期課程の入学者を確保しなければならない。</u></p> <p><u>博士後期課程の入学意向アンケート調査【資料 4】において、修士の学位を有している 6 名 (看護教員 3 名、病院勤務 2 名、その他 1 名) から「入学したい」との結果を得ている。</u></p> <p><u>それに加えて、本学看護学部長が実施した本学専任教員及び助手への個別面談の結果では、博士</u></p>	<p>(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取り組み状況</p> <p>①学生確保の見通し</p> <p>ア 定員充足の見込み</p> <p>(略)</p> <p>(追加)</p>

<p><u>の学位を持たない（修士の学位を持つ）2名が本学</u> <u>大学院博士後期課程への進学を希望している。</u></p> <p><u>したがって、博士後期課程の入学定員 3 名に</u> <u>対して合計 8 名の入学希望者を確認している。</u></p> <p><u>以上より、本研究科は長期的かつ安定的に学生</u> <u>確保の見通しがあるといえる。</u></p>	
--	--

(是正事項) 看護学研究科 看護学専攻 (D)

10. 採用意向アンケート調査について、審査意見1のとおり、設置の趣旨、養成する人材像及び3つのポリシーとの関係が不明確であるものの、本研究科は、教育課程を見る限り、看護系大学・大学院の教員不足を背景に、看護系教育者及び研究者を養成するものと見受けられるが、調査対象に、病院や介護保険施設、訪問看護ステーション、保健所・保健福祉事務所等の教育機関・研究機関以外の施設等が含まれており、調査結果の妥当性を判断することができない。養成する人材像を踏まえ、適切な調査対象を設定した上で、本研究科修了生のニーズがあることを改めて明確に説明すること。

【研究科共通】

(対応)

本研究科博士後期課程が養成する人材像については、「幅広い視野と深い学識をもって自立し研究する能力を有し、看護の質改善・向上のためにリーダーシップを発揮できる人材」として採用意向アンケート調査を実施したが、審査意見1を踏まえ、「看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人」と修正を加えた。

上記の本研究科博士後期課程が養成する人材の進路について、看護系教育者・研究者として教育機関・研究機関を想定している。したがって、近隣の看護系大学を調査対象と設定して分析する。

採用意向アンケート調査の結果を調査対象別(問2)にクロス集計【別紙5「【資料7】採用意向アンケート調査 問2とのクロス集計」参照】したところ、大学4校(うち神奈川県3校)から回答があった。本研究科の修了生を「採用したい」が2校、「採用を検討したい」が2校だった。さらに、博士後期課程修了者の採用可能人数は「2人」が1校、「人数は未確定」が3校だった。したがって、近隣の大学から教員又は助手として採用されるニーズがあるといえる。

また、調査の客観性の観点から、本学は採用意向アンケート調査の回答者に含まれていない。しかしながら、本学では、本研究科博士後期課程の修了生を専任教員又は助手として毎年1名程度継続的に採用することを計画している。

以上より、本研究科博士後期課程の修了生について継続的に入学定員3名を上回るのニーズがあると考えられる。

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類

新	旧
(6ページ)	(6ページ)
(2) 人材需要の動向等社会の要請	(2) 人材需要の動向等社会の要請
①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的(概要)	①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的(概要)

<p>(略)</p> <p><博士後期課程の養成する人材像></p> <p>看護学における幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のために教育・研究を通して発信できる人</p>	<p>(略)</p> <p><博士後期課程の目的></p> <p>博士後期課程の教育上の理念及び目的は、幅広い視野と深い学識を基盤に自立して研究できる能力を備え、人間の生涯及び地域に対する看護の質の改善・向上のためリーダーシップをとる能力を有する人材を育成することである。また柔軟な判断力・思考力をもって社会の変革やシステムの構築に寄与するとともに看護学教育の発展と看護学教員・看護学教育の質向上に取り組み、看護界のみならず地域の保健・医療に貢献していく人材を育成することである。</p>
<p>(10 ページ)</p> <p>オ 採用意向アンケート調査 (【資料 4】 調査②)</p> <p>(略)</p> <p><博士後期課程の修了生のニーズの分析></p> <p>本研究科博士後期課程が養成する人材の進路について、看護系教育者・研究者として教育機関・研究機関を想定している。したがって、近隣の看護系大学を調査対象と設定して分析する。</p> <p>採用意向アンケート調査の結果を調査対象別(問 2) にクロス集計【資料 7】 したところ、大学 4 校 (うち神奈川県 3 校) から回答があった。本研究科の修了生を「採用したい」が 2 校、「採用を検討したい」が 2 校だった。さらに、博士後期課程修了者の採用可能人数は「2 人」が 1 校、「人数は未確定」が 3 校だった。したがって、近隣の大学から教員又は助手として採用されるニーズがあるといえる。</p> <p>また、調査の客観性の観点から、本学は採用意向アンケート調査の回答者に含まれていない。しかしながら、本学では、本研究科博士後期課程の修了生を専任教員又は助手として毎年 1 名程度継続的に採用することを計画している。</p> <p>以上より、本研究科博士後期課程の修了生について継続的に入学定員 3 名を上回るのニーズがあ</p>	<p>(8 ページ)</p> <p>オ 採用意向アンケート調査 (【資料 4】 調査②)</p> <p>(略)</p> <p><調査結果></p> <p>上記調査において、回答のあった 260 件のうち、湘南鎌倉医療大学大学院看護学研究科看護学専攻の修了者を採用したいか質問したところ、「採用したい」が 26 件 (10.0%)、「採用を検討したい」が 77 件 (29.6%) あり、計 103 件 (39.6%) の機関・施設が採用意欲を示した。</p> <p>さらに、「採用したい」または「採用を検討したい」と回答した 103 機関・施設に対して、採用可能人数を質問したところ、博士前期課程が合計 108 人、博士後期課程が合計 104 人となった。</p>

<u>ると考える。</u>	
---------------	--